

タイトル・葬式の間違いに気づいて

序章・日本人の大多数が思っている葬式への思い

- ・お葬式ってお坊さんが祭壇の前で拝むやつでしょ？
- ・なんで葬式ってこんなに高いの？
- ・でも家族葬なら安いんでしょ？
- ・お葬式しなければ駄目なんでしょ？
- ・なんでお布施ってこんなに高いの？
- ・お経なんて全く分らないけど、お経と戒名で浮かばれるんでしょ？
- ・葬式って最低百万円掛かるんでしょ？
- ・死ぬのにいくらあれば良いんだらう？
- ・配偶者の兄弟姉妹がうるさいから口出しされそう

右箇条書きの他に思いつくものが無ければ、自身や家族が人生の終幕を迎える際、肝心なことが抜けている事に気づいてません。自分も葬儀支援をす

るまでは葬式について考えた事もありませんし、葬儀屋は胡散臭いと思つてたし、お坊さんは偉い人だと思つてましたが、十四年間、千数百件の葬式を施行と、過去の自分の経験を繋ぎ合わせ、初めて当たり前に行われている葬式の間違いに気づきました。改めて著者の経験を読むのは面倒だと思いますが、そこに葬式の本質がある為、サラッと流さず頭の中で映像に変換しながら読んで頂けると理解し易いかもかもしれません。また本書を読み進めれば今の葬式の間違いに気づき、後悔の無い家族との別れができるかもしれません。

著者紹介・ところで著者は誰？　どんな人？

中学三年で家業のスーパーが倒産する前夜、珍しく僕の部屋に来た父親は、「どうだ、元気でやってるか？」

優しい笑顔で言った。何も知らない僕は、

「はい、はい、元気ですよ」

「うん、それなら良い、人生色んな事があるけど、お前は男なんだから、何があっても強く生きていくんだよ」

初めて聞かされる言葉に違和感はありましたが、

「あいよお」

父親は「うんうん」と頷きながら部屋のドアを閉めたのが今生では最後となりました。翌日の午前零時を過ぎると倒産が確定、店の周囲に停めた車内で待機してた業者さん達が一斉に飛び出し、シャッターが開けられ、我先にと手あたり次第に店内の物を持ち出すのを霧雨が降る中で呆然と眺めていたのを思い出す。土地屋敷も含め全てを失った瞬間でした。

それからの人生色々ありましたが、三十七年の時を経て五十二才となった僕は県内ホテル二軒で婚礼美粧を手掛け、数件の美容室、貸衣裳など経営していた残暑厳しい九月のある日、自宅に戻るとベッドサイドのテーブルに通の封書が置かれていました。差出人の「八王子裁判所」を見て『俺、何かしたかな?』そんな自分に少し呆れてフツと笑いが出る。開封すると三十七年前部屋に来たのが最後で、蒸発した父親が逝去、遺言書があり開封に立ち会うか、委任状を送るよう書かれたものでした。

「八王子にいたのか――、」

妹に連絡すると同じ封書が届いてるらしく話しはすぐに通じました。

「お前行けるか？」

「うん、行こうと思ってる」

「そっか、俺は仕事で行けそうも無いから、お前に一任して良いか？」

「うん分かった」

予定日の翌日、妹に電話すると、

「行って来たけど、遺言書の内容はどうって事なかったよ」

「そうか、ところで親父は一人じゃ無かったろ？」

「うん、女の人が出来たから少し話を聞いたたら、結構いい生活してたみたいで、時々海外旅行にも行ってたらしいよ。残された家族は大変だったのにい気なもんだよね」

「そうかもな、で子供はいるのか？」

「いないみたい、一人で来てたもん」

「ところで、お前その女性の連絡先聞いたか？」

「うん、聞いたよ、ちよっと待って」

携帯の電話番号を聞いて電話を切ります。妹が非難する気持ちも分りますが、僕は一人寂しく生活して無かったことに安堵しました。ただ父親は七十四才

だったと思うので、七十才を過ぎたお婆さんが一人残されたことになります。

翌日教わった携帯に連絡、裁判所に行けなかったお詫びと、できれば一度お会いしたいと伝えると、今は地元神奈川県に戻っているとの事、お会いする日時の確認をして電話を切ります。七十才を過ぎた老人がこれから一人でどう生きて行くのか、生きる術はあるのか気になったからですが、かといって一緒に住むことはあり得ないわけで、それにしても父親の最後を看取ってくれた人であり、父親と人生を過ごした人に間違いありませんから、僕にできる事があれば——、と思つての連絡でした。

予定の日は、朝の渋滞を避け午後二時の待ち合わせ、三時間ほど走ると少し早く到着、周囲を見渡しますが、それらしい老人の姿は見えず、少し休憩しようと思つた途端、電話が鳴ります。

「到着ですね。すぐに行きます」

ん、そんな人いなかったけど、何処かで見えたのかなと起き上がると歩道側に一人の女性が立って、窓をトントンと叩きます。

「武井さんですか？」

「あ、そうですが、〇〇さんですか？」

「あ、はい」

すぐに降りて助手席のドアを開けると乗って貰いましたが、思ってた老人ではなく小綺麗にした初老の女性、七十才を過ぎたお婆さんは思い込みだと分り、フツと笑うと、

「何か可笑しいですか？」

「あ、いえいえ、思ってたより若い方だったので少し驚いただけです」

静かに話しができる場所を聞くとシティホテルのロビーに案内され、コーヒーを頼むと改めて自己紹介します。

「その節は父親が大変お世話になったようでありがとうございました」

「いいえ、当たり前前の事をしただけですけど、本当に息子さんですか？」

「本当にとは、どういう意味ですか？」

「彼とは三十年以上前、職場で知り合いましたが、ずっと天涯孤独の身だと行ってたし、今まで家族の話しは一度も聞いたことがありませんから——、」
暫く、こんな遣り取りでしたが、話しの流れで名前は「利之」だと伝えると、

「あー、そのお名前は甥っ子だと何度も聞かされています」

「はあ——、甥・・・ですか？」

「はい、何度も聞いてますから間違いありません」

「あのお、天涯孤独って言ってたんですよね？　なのに甥ですか」

「あ、ほんとだあ、今初めて気づきました。確かに変ですよ」

こう言って笑います。俗に言う天然の方ですが、これで打ち解けたようです。それから数時間、父親との生活を色々話してくれましたが肝心の話までには至らず、今日の予定を聞くと大丈夫という事なので、とりあえず食事をしてから部屋をとってゆっくり話すことになりました。

持ってきてくれた写真の中に頭にバンダナを巻いて数人の外人さんと写っている父親の姿があり、聞くと最後の海外旅行で車椅子を押して行ったそうです。

「写真の外人さんはお友達ですか？」

「いいえ、彼は何処に行ってもすぐに誰とでも仲良くなっちゃう人でしたから、この写真は最後のグアム島で仲良くなった人達です」

「あは、なら僕と一緒にです。僕もすぐに仲良くなれるタイプですから」

その中に父親の棺であろう写真を見つけ聞いてみました。

「彼は六十才の時、糖尿病を発症して最後は歩くのも大変でしたが、最後に

なると思つて車椅子を押してグアムに行きました」

「なるほどお、で葬式は？」

「はい、彼は全て近所の葬儀屋さんに頼んであつて、菊は嫌いだから赤い薔薇にしてくれ、線香の臭いは嫌いだから要らないと言われました」

「結構、我が侂な奴ですね、あはは、ところで遺骨はどうされたんですか？」

「はい、遺骨は全て海に散骨してくれって言われてましたから、リュックで背負つて好きだったハワイの海に全て散骨しました」

「なるほどねえ、父親が全て海に散骨してくれたって言った意味が分りますか？」

「え、海が好きだったからでしょ？」

「海は好きだったのですが、父親にとって貴女は大切な人だったんですね」

「どういふことですか？」

「理由は二つあります。ひとつは、自分の遺骨を残したら自分に縛られる人生になつてしまうのを避ける為、もうひとつは死後の自分は、貴女を守つてあげられませんから、いつも泣いてる姿を見るより、笑顔で過ごしてくれて

る姿をみてるほうが父親としても楽なはずです。だから何も残さない選択ですよ」

それを聞いた彼女は、目を真っ赤にして、

「今もこの場において私を見守ってくれてる気がするんですよ——、」

母親、子供達を捨てた父親ですから、家族としては微妙な気もしますが、それでも父親も女性も幸せと言える生活をしてくれた事にも安堵したし、なによりこれからの人生をまだまだ謳歌できるであろう年代でホッとしました。

せめてものお礼と思い、夕飯後は数時間休んで頂き、朝食、昼食は少し豪華に御馳走させて貰い、午後、彼女との時間を後にしたのです。帰り道の都内は混雑して時間が掛かりましたが、関越道に乗ると沈む夕日に向かって前橋まで戻ったのです。

前橋に戻ると葬式について調べます。一番不思議なのは今で言う「直葬」それもたった一人だけで火葬だけの葬式なのに、彼女は父親に言われた通りの葬式ができたからか、とても満足してたのは何故なのか知りたかったのです。普通に考えたら、坊さんもなく、祭壇もなく、焼くだけの葬式なら寂しいとか、申し訳ないと思うだろうに、あの満足感は何処から来るのか——、色々

調べてみますが、葬式を調べると、葬儀屋、宗教者、各々の立ち位置で色々書いてはありますが、家族目線の本音で書いたものはありませんでした。結局何も分らないまま数日が過ぎた時、経営する一店舗で社長室のある店長に聞きます。

「うちのお客様で葬儀社勤務の人っているの？」

「はい、沢山いますよ。殆ど小母さんですけどね」

「なら喧しくない人を、葬式で聞きたい事があるって連れてきてくれない」

それから暫くして連れて来られたのが、今一緒に支援活動を続ける千明ちぎらです。

聞き上手ですから、今の葬儀社に対する疑問、不信感を全て伝えると「素人さんは――、」くらいの事を言うだろう予測は外れ、全て納得して聞いてくれたのを良い事に、何度か立ち寄って貰ったある日、突然千明から、

「オーナーちよつと良いですか？」

「ん、なんででしょうか？」

「あの一、オーナー、葬儀屋やりませんか？」

「えっ、葬儀屋？ 嫌ですよ。遺体なんて見たくないし、触るなんて無理です。でも、何で僕に葬儀屋やれって言うんですか？」

「実はオーナーの話しを聞いてると、ひとつひとつがその通りって思うんですけど、そう思えば思うほど、今の自分は人を騙してるんじゃないかって思えてきて、今は営業に行けなくなってるんですよ」

「あー、そういう事かあ」

話しは理解できましたが、葬儀屋を自分でするなど頭の片隅にもありません。しかし一人の仕事の意欲を奪ったのは事実ですから責任は感じます。そこで、「分かりました。葬儀屋をする気はありませんが、葬儀業界の中で何かできるかもしれないから、明日から寺や葬儀屋を周って業界調査しましょう。まずはそれから良いですか？」

すると千明は満面の笑みで帰っていきました。この時考えてたのは葬儀屋紹介業です。当時は現在ある葬儀社紹介は無かったと思います。

翌日から手あたり次第に飛び込んで話しを聞きますが、何処に行っても同じことを言います。葬儀屋さんは、

「うちは喜ばれてますよ」

寺はと言うと、

「お布施はお気持ちですから——、」

当初は葬式を手掛ける人は、凡人の自分と違って人間ができてると信じました。

その後、葬式をした人達百名以上に話しを聞いた時、僕の中で何かが破裂することになりました。葬式した人達の大半も初めは同じように「助かった」

「良かったと思う」などと言いますが、慣れてくると本音が出てきます。

「とにかく葬式代が高くて驚いたわよ」

「最初の見積もりと、請求書で五十万円も違うってあり得る？」

「お布施って何であんなに高いのかしら——、」

「始めお気持ちでって言うから、それだと分りませんからって言ったなら、ちゃんとメニューがあって五十万円って書いてあった。だからさ、知り合いに聞いたのよ。最初はお気持ちでって言ったんだから、気持ちで五万円とか、十万円包んでも良いのかねって。そしたら、足らないって言われるんだって、なら最初からそう言えば良いじゃんねえ」

これって変でしょ？ 葬儀屋に対しての評価は、高いと言ってるけど喜んでないし、布施はお気持ちと言ってた寺は定価表があったり、本当に気持ちで包んだとしたら、それを高いとは言わない訳で、結局はどちらも建前でし

かないんです。葬儀屋も寺も聞いたままを信用してただけに、詐欺師のような側面を知ってムカつきました。

四月にNPO法人の申請を済ませ、法人設立の少し前、突然知り合いを通して葬式の依頼が入ったので、何処の葬儀屋も大差ないと思い近くの葬儀屋に三万円の紹介料で依頼したら、これが素人の僕が見ても最悪な葬儀屋だった事で、無責任な紹介などできないと自分達で施行する決心をするわけです。「最高の反面教師となった最悪な葬儀屋」

依頼電話を切ると、すぐに近くの葬儀屋に行き、それから葬儀施行の依頼と紹介料は三万円と伝え、すぐに搬送の準備をして貰い、我々も自宅に向かう。自宅前に到着すると故人を運ぶ寝台車到着までの三十分、初めての葬式施行について思いつく事を話していると、故人を病院から運んできた寝台車が到着、部屋に布団を敷き、初めてストレッチャーを持つが重い――、故人を布団に寝かせると葬儀屋さんは車からドライアイスの包みを下してきて、縁側で綿花に包んでいる『会社で包んで保冷庫で持ってきたほうが仕事ができそうなのに』その時はそう思っただけでしたが、これが、この葬儀屋の全てと後で分ります。故人の身体にドライアイスを当てると、我々にパンフ

レット類を渡して、

「決まったら教えてください」

唾然とする我々を尻目に当然のように帰っていきます。内心『えーっ、何も分らない俺が相談するのか！』と叫びますが、表面的には落ち着いた態度で、打合せに入ります。当初はお金が無いとの事で直葬を勧め、話しが進みますが、途中で叔父さんという方が来て、

「焼くだけって訳にいかねえだろ、費用は俺が出すから葬式の形だけでもしようよ」と急遽、斎場一般葬に変更、料理は安い弁当にし、供物類も斎場備品で無料の物だけにするなど、最大限費用を抑える相談をしていると、そのうち親戚が集まってきて相談し難い状況になったのを見て、叔父さんと一緒に布施の値引き交渉に向かい、金が無いんだからと強気な発言で四十五万円を十五万円まで値引きしました。人は自分の事より他人の事のほうが強気になれるようです。自宅に戻ると打合せできる状況でなく、一旦戻り、再度夜に打合せとなりました。

全ての打合せが終わったのは日付が替わった頃、外に出るとどしやぶりでしたが、ずっと待っているであろう葬儀屋社長に電話すると、

「組合の飲み会で伊香保温泉に来てるから明日聞きますよ」

「はあ？ だから運んだ早々に帰ったのかと分ると『なら受けるんじゃねえ』と腹が立ったが、葬儀屋がどうであれ引き受けた依頼は最後までやり遂げねばならないと腹の中に抑え込んだ。」

翌々日、湯かん納棺の儀、以前家族の葬式でした事があり、手甲や脚絆を手足に縛って装着した記憶がある。葬儀屋さんが到着すると、家族は布団を囲んで立っていたが、葬儀屋さんが棺を運び込み布団の横に置くと突然、

「これより湯かん納棺を始めます。合掌！」

の声に僕も含め家族全員が慌てて合掌すると即座に、

「直れ！」

『お前は軍隊長か！』と心の中では突っ込みを入れるが、くちにはだせない。これから座るのかと思っていると、

「皆さんでシートの取っ手を持って棺に入れます」

『えーっ、手足拭くんじゃねえの』と再度心の中だけで突っ込むと、安っぽい白い布切れを出して、

「近しい方からどうぞ」

と布切れを渡し、

。「手の辺に置いてください」「足の辺に置いてください」

全て、辺に置いてくださいますのまま、サツサと線香の準備に入った。この間わずか五分――、新幹線どころか飛行機より速い湯かんだろう。

冷房の無い家で暑く、少し風に当たろうと外に出ると、葬儀屋の息子さんだろうか、ただ一人忙しく動き周っていた人も、隣に並んだので聞いてみる。

「葬儀屋さんの息子さんですか？」

「いや違います。葬儀スタッフの派遣会社を経営してる者ですが、今日は全員出払っているので急遽私がきました」

「あ、社長さんですか失礼しました」

「だよなあ、この親にして、この子あらずだわな――、一人納得したのです。」

翌日の葬式は暑い中で執り行われましたが、この社長は吸い殻入れの前で知り合いの葬儀屋さんらしき人とタバコを吸いながら談笑、一人の男性が忙しく動き回っており昨日の派遣会社の人です。火葬中の待合所を確認に行く
と、お手伝いに来てくれてる隣保の女性から、

「うちの地区はお茶入れしませんけど大丈夫ですか？」

と聞かれたので、すぐに社長の所に行き、その旨を伝えると、

「あー、それ我々の仕事じゃないですよ」

この一言で軽く切れ、

「誰の仕事かが問題じゃねえだろ、引き受けた以上、最後までちゃんとしろ、さつきから見たりやタバコ吸ってるだけじゃねえか自分でやれ！」

それを見た千明が自分でしようと待合所に走りますが、見ていたのは千明だけでなく隣保の人達にも聞こえてたようで、

「お茶入れは私達がするから心配しないでください」

と対応してくれたようで、何とか葬式を無事済ませることができました。その数日後、三万円持ってきた社長の顔見た途端、溜ってたものが爆発して、

「やる気がねえなら初めから受けるんじゃないやねえ！」

「や、やる気はありますよお・・・」

当然のことながら二度と依頼はしてません。この話しには続きがあつて、それから暫く経ってからの事、初めに依頼してきた知り合いから、

「家族から言うなって言われてたけど、私も納得できないから言うけど、葬式が終わったあとで、あんしんサポートに紹介料三万円払うから、それを

払ってくれって来たんだって、そんなのってあるの？」

そんなのある訳がない。紹介料は自分の利益から支払うのが当たり前だし、それもわずか三万円です。葬式も満足にできないくせに、商売の倫理も持ち合わせてない最悪の葬儀屋に初めての葬式を依頼した事で、葬儀屋は何処も大差ないどころか、葬儀屋毎に全く違くと痛感、こんな葬儀屋でさえ「うちは喜ばれてる」と言えちゃうのですから、外から見ただけで葬儀屋を判断するのは間違いだと身をもって、それも初めての葬式で経験できたのは長い目で見ればとってもラッキーでした。この経験から葬儀社紹介は責任もてないと判断、なら自社施行するしかないと腹を括ったのですから、最悪な葬儀屋への依頼は、見方を変えれば最高の反面教師だったのです。

「葬式施行のいろはを教えて貰った葬儀社」

この時点ではまだ葬式経験者の人達と話す前でしたから、葬式の翌日から無闇に飛び込むより、評判の良い葬儀屋に絞った事で、まともな葬式の出来る葬儀屋さんに施行依頼する形のNPOの葬儀屋としてスタートです。

初めのうちは「凄い」「さすが」と思っていました。が、県内地域別に依頼先が数社できると、良くも悪くも葬儀社毎の違いが見え始めますし、僕自身が多素人のせい、葬儀屋目線にはなれず、家族目線で見ている自分がいました。また自分達で施行できないのに、新聞で一般葬儀社の四割価格と記事になったほど低料金でのスタートでしたから、提携する葬儀さんに支払うと、百万円の葬式代でも手元に残るのは数万円——、『これじゃあ、いつまで経っても食えるようにならない』と思うし、慣れてくると地域毎の葬儀屋がしている事に『そうかなあ』『そうじゃねえだろ』的な感覚が増えてくると改めて『俺には葬儀屋はできない』と実感するのです。

元々葬儀屋がしたい訳でなく、今まで忌み嫌ってきた職業で、葬儀屋さんには胡散臭い人間と思って「いた」の過去形でなく「てる」の現在進行形だし、父親の最後を看取ってくれた女性は、火葬だけの葬式と散骨でしたが、僕が見ても満足してるのが分るほど、彼女にとって最高の葬式ができたわけです。現状の葬式と、父親の葬式は何が違うのか——、と考えると、ひとつの答えに辿り着きました。端的に言えば——、次の二通りの考え方の違いが、葬儀、葬式に於いては大きく雲泥の差になるようです。

後悔の少ない葬式になり易いのは『生前から死後を予測した家族』

建前や世間で無く、自分達を最優先し、あるがままの現実を受け入れ、今何をすべきか、何ができたのか、そしていつか迎える終幕後に慌てない為、冷静に考えられる時に決めたことを、ひとつ、ひとつ、実行する事が対象者と残る家族のすべき事、それらが出来れば故人も残る家族も後悔せず、満足できるお別れになるはず——、この想定を実行した家族です。

『生きてるうちに死んだ話など、早く死んで欲しいのか！ 的家族』

実際はこちらのほうが多く、ちよつと聞けば納得しちやいそうですが、その場だけの現実逃避を屁理屈で正当化する家族です。死後の話しをしたから死ぬ訳ではありません。そう遠くない未来に対象者の終幕は確実に訪れますし、葬式は絶対に必要なんです。その費用も分らず、後に残る家族の生活も一切考えず、ただ死を待つだけの日々に何の意味があるのでしよう。いつ何

が起きても慌てる事なく冷静に対処するには誰も助けられないのですから、家族で見栄や世間体は全て省いた本音の相談と行動だけが『転ばぬ先の杖』なのです。

簡単に言うと、この両者の違いだと気づいたのです。葬式とは世間体、見栄でなく、お金を掛ける掛けないでもなく、生きてる時にしっかりお別れを受け入れるのに必要なことをしてきたか、してこなかったかなんです。

父親の葬式を思い出してください。六十才で糖尿を発症、七十才の頃は歩けなくなり、だから最後の旅行だと車椅子を押してグアム旅行に行き、父親は自分の葬式を全て近所の葬儀屋に依頼した上で、線香は要らない、赤い薔薇にしてくれ、遺骨は全て海に散骨してくれと伝え、彼女は言われた通りに動き、できた事に満足をする。この二人の場合、お別れに数年間を要しているのが分ります。だから死後も自分を見守ってくれている気がする——、と言えるのでしよう。

この事実を葬式のあるべき姿とするなら、今の葬式の多くは明らかに間違ってる分ります。それと、父親が残した遺言の内容はどうってこと無かったと妹は言いました。どうってことの無い遺言を父親はなぜ残したので

しよう。遺言書を書けば家庭裁判所で開封する事になり、法定相続人全員に連絡が行くのを知り、自分の死を他県に住む家族に伝える為の遺言書？ と考えるのが最も理に叶っているし、きっとそうなのでしよう。

しかし僕には父親としての最後の教えかもしれないと感じるのです。それは、今の葬式の間違いを自分の死と葬式の現実で僕に伝え、人は誰でも死ぬのに葬式は高額な費用が掛り、その葬式で満足することはなく、大事なものは死後でなく生きてる時であるとの教え、また、これ以降の流れは千明と的一件でも分るように僕の意味は完全に無視、葬儀支援をするしか無い流れが十年近くも続くのですが、この数年後には『葬儀支援、これがお前の天職だよ』と父親に導かれたような気がし始めるのです。

五十有余年の齢を、若き頃はサラリーマン、サラリーマン役員、美容業経営者として生きてきました。が、突然でもあり、偶然の流れで葬儀支援を始めから十年以上の無休が続き、電話一本入れば二十四時間いつでも仕事に入り、体調を崩しても休めず、徹夜が続き自分が先に死ぬんじゃないかと思う時だってあったし、労働時間を考えたら、考えなくても――、何とかは食えるけど、決して高収入ではない十四年、普通に考えたら馬鹿々々しいと思っ

でも不思議では無いのに、辛いと思った事はあっても「嫌」だと思った事はなく、我が人生の中で今が一番、堂々と胸を張り、生き甲斐を感じながらの人生なのですから、これを天職と言わず何という——、その道を示してくれた父親には感謝です。

あ、ひとつ伝えておくと、ホテル二軒で婚礼美粧、美容室数店舗、貸衣裳など最高年商三億円の美容業は、全盛期を超え衰退気味ではありましたが、あんしんサポート設立後も並行して経営してたある日のこと、お爺ちゃんのお命宣告を受け、事前相談にいられたお婆ちゃんの話しを聞くと、かつて自営だったため、夫婦ともに四万円ほどの国民年金しかなく、お爺ちゃんが亡くなっても遺族年金はなく、ほぼ半額の年金で生活するしかありません（法的には差額を生活保護申請できますが、車は乗れず、保険は全て解約、自宅があれば受けられずで申請しない人も多い）それを聞いてた僕のくちから出たのは、

「大変だよねえ、分るよ——、」

自分の言葉に違和感を感じ、お婆ちゃんが入会手続きを終えて帰ると事務所に戻って自分の言葉の違和感を整理しました。そこで分った。気が付いた

のは、自分の言葉は『偽善』でしかない事でした。当時はそこまでの収入はありませんでしたが、かつては一千二百万円の役員報酬を頂戴してた流れの今ですから、お婆ちゃんの現実など分らないのが本音です。その後も。これに近い事が続いたある日ひとつの決心をします。『法人閉鎖』です。

経営者の前は、理美容室の材料を卸す会社で、美容室の経営指導を主とした役員でしたが美容師ではありません。美容室の営業終了後、会議や講習をしたり、美容室の経営者に経理を教えたりしてましたから、経営者の中には、「武井さん、一緒に商売したいですね」

と言われる事もありましたが、社交辞令ですから、「そうですね」

と笑顔でアツサリ答え、そのまま過ぎるのが普通です。ところが、ある経営者から突然呼ばれ何うと、会社の定款を見せられ、

「有限ですけど武井さんが代表の会社を作りましたよ」

えっ？ 確かに僕が代表の会社が登記されてました。あまりに突然過ぎて何も語れないまま帰った数日後、夜中の腹痛で緊急入院、翌日まではずっと点滴、翌々日からは考えられる疾患十か所ほどの検査が始まりましたが、毎日

でなく決められた曜日の為、約一か月の入院生活となりました。痛みが無く
なると病院は暇すぎます。そこで外出許可を貰い、新しくできた会社の仕事
見たり、手伝ったりしながら消灯時間の九時に病室に戻る。今まで夜中の帰
宅が当り前ですから、午後九時に寝られるはずがありませんから色々考え得
たのは「流れに乗ってみよう」でした。

それから一年間を掛けて退社、七百万円を投資して株式会社に変更し、名
実ともに代表取締役となった会社、考えてみれば七百万円の投資で二十年
食ってきたし最高一千二百万円の年収を得られたのですから、この年だけで
充分元は取れてるわけで、これ以上欲をかく必要はないし、スタッフ達にも
負い目は無くなると法人閉鎖を決めました。法人閉鎖は結構時間が掛かり、
手続き開始から半年を要しましたが、全て完了した時点での、あんしんサ
ポートでは食える状態でなく、ようやくお婆ちゃんと同じ目線に立てた瞬間
でした。また狙ったわけではなく、法人閉鎖は二〇一二年十月三十一日、あん
しんかん開設は翌日の十一月一日、こんな偶然ってあるんですね。また、あ
んしん館が出来た月から食えるように、現在に至るのも不思議だし、つい
でに言うと、あんしん館の開設に出した費用は税込二十一万円だけです。簡

単に書くと、僕は撤退するつもりで撤退八か月前に家主法人に伝えると、部長（現社長）が飛んできて賃貸契約の継続を懇願しましたが、最終的には改装工事は全て家主さんがしてくれる事になるなど、最後まで嫌々ながらも五十坪ほどの、あんしん館を開設、あんしん館開設で支払ったのは、僕自身が引いた図面に、式場ステージとバックヤードのシャワーユニットを書き忘れ追加した二十一万円だけです。

とにかく、葬儀屋なんて絶対したくない僕の意味は無視するかのような周囲の強い流れで、あんしん館設置まで進むと、簡単に引けなくなっただけで、今まで以上に新聞記事に取り上げられたり、翌年にはNHKのテレビ放送用に暫く取材を受け全国放送してくれた事もあって、会員数も利用者も大幅に増え続け、気が付けば生き甲斐を感じるほどで、もしかして「天職？」と思いは始めるのです。この流れは、その後も続き現在に至るのですから我ながら不思議です。

本章では「今の葬式の間違いに気づけ」と一石を投じた著者が、何となくや、思いつきで言ってるわけではなく、突然の不思議な流れから葬儀支援の道に入り、十四年間、千数百件の大小様々な葬式を経験させて貰った上で、自

然に辿り着いた葬儀、葬式の本来あるべき定義と理解して頂ければ充分です。

「葬式は要らない？ いいえ、とても大事です」

宗教学者が『お墓なんて要らない』の本を出しヒットした事で、二年後には『葬式は要らない』を出版、柳の下のどじょう狙いなのだろうか、葬式の実際を知らない人の戯言か、愛する人、大切な人のいない人か？ と思われなくても仕方ないタイトルです。実際は高額な費用の掛かる現行葬式への反論だろうと思いますが、くれぐれもタイトルだけを鵜呑みにせず『葬儀・葬式』とは何か我が家の葬儀観を話し合っただけかと思えます。また小さな子供達にとって、とても大切な、人としての倫理教育にもなるでしょう。まず『葬式』と『葬儀』の違いについて、あんしんサポートの定義を書き記してみたいと思います。

「人の死、葬儀、葬式の前提として知っておく事」

・人の死は特別な事ではなく自然の摂理

自分の死は恐いし、家族の死は悲しく、出来ればどちらも経験したくない事ですが、生きるもの全て、死は自然の摂理、どんなに金持ちでも、どれほど優秀な人間でも、世界のトップに君臨する人だとしても、永遠の命は存在せず、人はこの世に生を受けた瞬間から己が人生の終幕に向かい歩み、これを人生と呼ぶ、生を受けた直後に閉じる人生もあるが、長くても百年ほどで人生の幕を下ろす。人類の歴史には不老不死の命を求めた者も数知れずいるが、冷静に考えてみて欲しい。もし、あなたが不老不死を手にしたら本当に幸せだろうか。

ひとつの例を挙げると、旅行が好き人は多いが旅行が何故楽しいか考えた事がありますか？ 知らない土地の観光、綺麗な景色、名物を食べる、人との交流などなど様々な理由はあるでしょうが、その旅行が帰る当ての無い旅だとしても楽しいと言えるでしょうか？ そう、浮浪の旅なら楽しくないのです。これで分るように旅が楽しいのは、帰る家（場所）があるから楽しい。とすれば人生に終わりの無い不老不死は楽しいでしょうか——、五百年、

千年、一万年と生きるとしたら、人生を楽しもうとするでしょうか、頑張ろうと思うでしょうか、病気になっても死ぬことはないのです。家族、友人知人は、百年もすれば誰一人としていなくなる――、人生も旅行と一緒に、終わりがああるから今を精一杯生きようとするし、楽しもうとするし、謳歌しようと思うし、悔いの無い人生を生きようと思うのではありませんか？

- ・人の死は宗教が生まれる前からあった

葬式を宗教儀式だと思っている人も多いが、人の歴史を振り返ると、人がこの世に存在した時から人の死は存在しており、火山噴火、嵐、洪水、雷、地震など、自然の驚異を神として崇めたのが宗教の始まりと考えられ、宗教が生れる前から人の死があったのは間違いない。また人は男性だけでも女性だけでも子孫は作れず夫婦が最小規模の家族、子供が生まれると三人の家族、さらに生まれる度に四人、五人と家族は増えるが、自分達を産んでくれた父母は数十年後に人生の終幕を迎えるのだから、人の死は宗教儀式より、家族との別れが先と考えるのが自然で、この法則は現在でも変わることはない。

・葬儀とは、家族や愛する人と別れを受け入れる為の時間

僕の父親と相手の女性は数年間を使い、互いに別れを受け入れる為、最後の旅行になるとグアムに行ったり、自身の死後についての事前相談をしたり、逝去後にして欲しい事を話し合ったり、日々の生活に至るまで、いつ訪れるか分らない終幕、お別れを受け入れられるまで、考えられる可能な限りの事をして過ごしたのでしよう。その結果として、死後も自分を見守ってくれていると感じられる。勿論、悲しさや、寂しさはあるだろうが、ともに過ごした三十年余りを幸せだったと感じられるよう最後の時間を過ごしたんだと思う。俗に言う『終わり良ければ全て良し』を実行したのでしよう。長い時間を過ごした中で喧嘩もしたでしょう。別れようと思った事だっただけであつたでしょう。お互いが鼻についた事だっただけであつたでしょう。それも含めて幸せな人生だったと言えたら――、素晴らしいと思いませんか？ さだまさしさんの関白宣言ではありませんが『お前のお蔭で、いい人生だったと俺が言うから、必ず言うから』めおとしんせい『こんな夫婦人生にするか、しないかは、全て自分達の考え方次第です。』

もうひとつ言うと、自分の終幕、配偶者の終幕、家族の終幕はどんなに考えても正確な回答はできませんし、考えれば考えるほど不安と恐怖に怯える日々になりますから『今日はこれをしよう』『明日はあれをしよう』『来月は旅行に行こう』と、いつも小さな目的、目標を立てるのはとても良い事だと思います。その意味では少し前に流行った『終活』『エンディングノート』も似たようなものですが、出来れば前者のような考え方と言動をお勧めします。生きてる時間、意思の疎通ができる時間、一緒に楽しめる時間が、死後の葬式より何倍も大事な時間なのが理解頂けたでしょうか？

それと故人に逢いたいと言う人がいます。普段から交流があり、いつも逢ってた人が言うなら何も言う気はありません。「どうぞ、逢ってやってください」と本音で思うでしょう。

しかし普段は顔も出さず、ろくに見舞いにも来ず、死んだ途端に逢いたい、これって変でしょ？ 本当に逢いたい人は存命中に逢いに来るはずだし、同じ逢うなら意思の疎通が出来る時、出来れば茶飲み話しができる段階で逢いたい、逢わせてあげたいと思うのが普通です。対象者が逢いたいと思う人が

いるなら、できるだけ元気な時に逢わせてあげられるのも、別れを受け入れる為の時間です。故に最も大事なものは葬式でなく、存命中しかできない『葬儀』の時間なのです。

・葬式とは、愛する故人に代わり生前の処理、整理をする時間

どんなに別れを受け入れる為に濃厚な数年間を過ごせたとしても、夫婦のどちらかが先に逝きます。或いは恋人同士、親子、祖父母と孫かもしれない。それが誰であったとしても、人は死んだら、この世では何もできないのは当然のこと、しかし生きてた時に使ってた肉体は残り、火葬しても焼骨は残ります。さらに使ってた物や金や不動産など全てが残りますから、故人が安心して逝けるよう、肉体も含め、この世に残した全ての整理や処理を、故人が最も信頼できる人達が責任もって行い、対象者からは安心して任せられると信じて逝ったあとが葬式という時間であり、残された家族、愛する人達にとって別れを受け入れる最後の時間ですから、自分達の事を最優先した葬式をすべきなのに、集まった親戚の食事まで世話して、バタバタ動き回る家族、居間にどっしり座り込んで偉そうに居座る親戚、この凶式は誰が何と

言おうと理解できません。

あなたが親戚の立場なら、家族が疲れないよう気を遣いましょう。家族用の弁当や弔問客用にお茶のペットボトルを買って持っていくなら分りますが、自分達の食事を用意させるなど愚の骨頂です。また家族は何日もちゃんと寝られず過ごしてるかもしれません。お手伝いしても長居をしてはいけません。

・自分の死後に心配なのは葬式ですか？

では、対象者である故人が存命中は、どんな事を心配し、どんな事を考えるでしょうか、自分が対象者だったら——、とシミュレーションしてみましよう。

あなた自身が病で死を覚悟する必要があったら、最初に湧くのは死への恐怖だろうし、死を避ける方法を模索、命と費用の天秤に悩むこともあるだろう。しかし回復の可能性が絶たれ、否応なく自身の死を受け入れなくては成らないと悟った時、あなたの心に湧き出るのは自分の葬式の事だろうか？
豪華な祭壇、大勢の会葬者、豪華な食事、返礼品は何にしようと思うのだろ

うか、僕の知る限りそんな人はいない。自身が家長であれば、残る配偶者や家族の生活を案じるのではないだろうか、母親なら子供達の将来を心配するのではないだろうか、自分の葬式を含めた死後費用で無理させまいとするのではありませんか？ だとしたら、残された家族が考えるべきは、故人に心配させないようすることですが、逝去するまで何の手も打たないでいたら『無理』と言い切れるのが、今の葬儀屋だと思っていいでしよう。

葬儀屋は奉仕事業ではありません。良く言えば家族に代わって葬式の全てを代行する商売とも言えますが、ぶっちゃけ言うと、人の悲しみを突いて、靈感商法と誘導商法で、できるだけ高額な葬式にして儲けたいのが葬儀屋の本音です。また宗教者も同様、法話では偉そうな事を言うし、自分は人間が出来てるかの如く話しますが、最低三十万円、上限は百万円以上で天井知らずの謝礼を要求、こんな人の言う事が信じられますか？ 結局は自分の寺の経営ができる金額で布施を設定してるに過ぎず、檀家の経済状態など考えていません。この点に関しては、事前に決める。できれば家族全員が元気な時に我が家の葬式を決めておく事以外の方法はありませんから、依頼する葬儀屋、葬式費用に至るまで全て明確で正確に決めておかなければ絶対不可能と

思つて欲しい。

・あの世に金はない。だから供養に金は掛からない

葬式をする家族の中には、供養を金で解決しようとする人がいます。お坊さんに有難いお経を唱えて頂き、高価な院号付き戒名を付けて貰えば供養したと思つてる人がいます。なら聞きますが、読経の意味は分りましたか？

故人は分ると思いますか？ また、あなたが故人で仮てんじゆいんみに天寿院明淑照室大姉ようしつだいしの戒名を付けて貰つたと思います。あの世に逝つた途端、後ろから戒名で呼ばれたとして、自分の事だと分ると思いますか？ もう少し突っ込んで言うと、あなたが払つた謝礼は誰が使うのですか？ 故人に使つてくれますか？ その金を使うのは生きてる坊さんの生活費だったり、高級車だったり、飲みに行つたり、パチンコしたり、本山への上納金だったりではありませんか。最も僧侶には魔法のような法力があり、読経、戒名に法力があるなら話しは別です。僧侶にそんな力があると思いますか？ ハッキリ言います。供養にお金は掛かりません。されど心が無いとできません。それが供養で、供養の基

本は「故人を忘れない事、時々で良いから思い出してあげること」です。

もつと言え、供養は遠方にいても、海外にいてもできます。墓参りが大事な訳ではありません。よく考えれば分ります。墓参りに行くのは、その前提として故人を思い出したから行くのではありませんか？ 墓は個人の焼骨を納めてある所ではありますが、それ以外には何もあります。最高の供養をお教えします。

『後に残る家族が、毎日を元気な笑顔で過ごす姿を見せ続けること』

これ以上の供養はありませんし、最高の供養は家族にしかできません。もうひとつ思い出したので書いておきます。これは霊的な部分もあるので信じる、信じないはあなた次第ですが、祖父母や両親が夢枕に立ったら、あなたの事を心配してると思ってください。フツと思ひ出したら『心配してくれているんだね元気だから心配ないよ。ありがとう』と伝えてあげると良いでしょう。

・あなたは厚い信仰がありますか？

色々書いてますが全て「無信仰」を基準に書いてますので、あなたに厚い

仏教信仰があるなら違う部分があります。著者は完全なる無信仰者ですから、どんな信仰でも基本的に色メガネで見ることはありません。見るのは信仰内容ではなく、信者の人達の人間性です。なぜか、信仰とは生きる指針ですから、信者の多くがどんな人間性か見れば、その信仰の良し悪しは分るからです。多くの信者を集めてる宗教でも「はあ？」と思う信者ばかり目につく宗教もあれば、一般的にはどちらかと言えば嫌われてるであろう宗教信者でも、人として穏やかな人達だなあと思うし、信仰する気はありませんが、きっと素晴らしい教えなのだろうと思う宗教もあります。いずれにしても自分が信じる信仰があるなら、日頃からその指針で生きてるでしょうから、その先にある「死」も信仰に沿って行えば良いのです。

日本人の多くは線香を供えるのが当然と思ってるし、神道の神葬祭で線香を供える家は決して珍しくありません。信仰や宗教より慣習として行っているようですが、個人的には全く問題ないと思います。また仏教は線香・焼香、神道は榊で玉串奉天、カトリックでは白い花を献花で儀式っぽいけど、同じキリスト教のプロテスタントは庶民的だし、エホバの証人はお祈りだけと様々ですが、自分が信じる信仰に沿って行えば何でも良いと思ってます。だ

から無信仰の人達が宗教儀式をする必要はありませんが、したいなら線香供えても良いし、玉串奉天でも、献花でも構わないんです。僧侶に読経して貰っても、神主に祝詞をして貰っても構わない。ってゆーか、今の葬式の大半は、ほぼ前者に近い読経であり戒名です。ついでに言うと、自分に厚い信仰があるなら、自分の信仰で故人を偲べば良いのです。大事なのは宗教作法で無く、おくる人の「心」だからです。

「死に際して起こる現実」

・ピンピンコロリとはいかない現実

ポツクリ観音と言われる観音様は全国各地にあります。ピンピンコロリは理想の終幕だからです。とはいえ若くしての逝去はピンピンコロリとは言いませんから、この言葉を使うなら七十代後半からでしょうか――、うちの施行でピンピンコロリと呼べる故人は数名しかいません。千数百施行で数名ですから

簡単ではありませんし、家族はとんでもなく驚かされますが、落ち着いて考

えるとピンピンコロリだねえって分る感じですよ。当人にすれば入院も入所もせず、普通に生活して突然の心配停止、逝去後の顔も穏やかです。ただ現実には入院、入所、或いは自宅介護の末の逝去ですから、本人も大変ですが、家族も費用面や看病で大変なのが大多数であり、費用面でも月に十万元以上掛かるのも普通ですから年金額によっては賄えない事もあるでしょう。

・死体処置費用、病院、施設の支払いが残ってる

病院、施設で終幕を迎えると、家族を待って死亡診断、直後に葬儀社に連絡してお迎え時間の確認、続いて一時間ほどの死体処置、その後、安置所まで搬送して安置と慌ただしく進みますが、支払いが二つ残っています。

① 入院、入所費用

入院は日数計算されますが、施設は日割計算と月割り計算があります。施設入所してた人は、死亡診断書は医師又は歯科医師以外は書けない為、施設が依頼した医師が死亡診断します。また長期入所者は、家財道具が増え遺品整理業者が必要な事もあります。胡散臭い業界なので施設等で確認しま

しょう

② 死体処置費用、死亡診断書費用

逝去すると担当医が死亡診断、次に清拭^{せいしき}、身体を拭く事と、開口部を塞ぐ処置をします。以前は綿花でしたが最近は透明のゲル処置が増えています。また浴衣^{ゆかた}を着せる病院、施設が多いですが、これは着せ易い為です。売店等院内で買うと四千円ほどしますので、事前に安い店で買って届けておいても良いし、着てたパジャマでも良いし、キリスト教の人達はスーツ姿にして貰うことも多く、着せたい服があったら持って行き担当看護師に渡しておけば逝去時は着せて貰えます。死亡診断書は普通五千円〜七千円ほどですが、警察の検視が入り、死亡診断書の文字が二本線で消されると、死体検案書と名前を替え、群馬県の場合一万五千円〜五万円以上請求される事もあります。(担当した医師次第) ちなみに東京都だけは警視庁が検視医を抱えているので無料、但し都内全域を周る為、日によっては半日以上掛かる事も珍しくありません。

・葬式後も残る家族の生活は続き、誰も助けに来てません

家族が逝去すれば誰でも混乱するし、周囲は葬式のことばかり話題にしますが、一番大事なのは「残る家族の生活が守れる葬式をすること」です。逝去までに医療費が嵩かさんでも不思議ではなく、財布事情が厳しいのも珍しくありませんが、余裕が無くても恥ずかしい事ではありません。ただ葬儀屋によつては金がないと伝えると、

「なら借りてください」

と言われたという葬儀屋もあるし、

「大丈夫ですよローンで払えますから」

とローンを組ませる葬儀屋もあるので、この辺りは要注意です。更に無責任な親戚の言葉を聞き、無理して見栄を張り、後の生活に支障がでるほうが遥かに問題です。理由は簡単——、あなたの生活に支障が出たら何とかなるまで助けてくれる親戚がいますか？　ぶっちゃけ誰も助けてはくれません。家族の事も考えず無責任に大きな葬式が良いと横から口を出す親戚は結構いますから、こりゃ駄目だと思えば、

「なら聞きますが、この家族が生活に困ったら助けるんですね？」

と聞いて「はい」と答えた親戚は一人もいません。

「えっ、それは——、」

大抵はこんな感じですから、

「なら、みつともないから黙ってたほうが良いですよ」

と何度も黙らせた経験があります。こうでもしないと家族が守れませんし、仮に僕が親戚と喧嘩しても二度と逢うことはないから心配いらないけど、家族は喧嘩するわけにいきませんからね。すぐに引き下がらない親戚には、「なら、貴方がお金を出して他所の葬儀屋に行けばいい、僕は引き受けない」とまで言います。過去に一軒だけ葬儀屋に変更した家族がいましたけど、そのまま施行したらモヤモヤが残るから断って正解です。

葬儀支援をする側も、場合によっては断るほど本気ですから、依頼者は事前相談で選びますし、こんな事を言う葬儀屋は絶対にいませんから、事前相談は基本絶対条件なんです。また病院、施設を始めとした公的機関からの依頼だけは事前相談なしで引き受けてますが、ソーシャルワーカーがしっかり説明してくれていますから、逝去後でも問題になった事はありません。ただ紹介で事前相談に来られた家族では二軒ほどお断りしました。

我々以上に自分の生活は自分で守るべきは家族自身ですから、存命中から万が一を予測した動きをしておくのは絶対条件です。確実に家族の生活が守れる範囲での葬式をしてくれる葬儀屋が見つかるまで探しておく――、但しそう簡単ではありません。事前に全ての内容と総支払額まで明確に提示できる葬儀屋でなければ意味はない「うちは安いですよ」では駄目なんです。

「存命中に必ずしておくこと」

・配偶者死後の正確な収入確認

相談者が老人だけの世帯なら事前相談で確認する項目のひとつです。考え方を箇条書きで書いておきますので、自分達の場合を計算してみましよう。

① 配偶者逝去時の収入及び遺産相続

- ・ 国保からの葬祭費、群馬県を含む殆どは五万円（逝去から二年で失効）
- ・ 年金は必ず未支給分があります（一か月分又は二か月分）

・生命保険、終身保険などの保険会社の確認と受け取り試算

※生命保険は「被保険者」「支払者」「受取人」が誰かで課税が違います。

① 「被保険者」「支払者」「受取人」全て故人なら遺産

② 「被保険者」「支払者」は故人、「受取人」は配偶者か子供なら遺産

③ 「被保険者」は故人、「支払者」「受取人」は配偶者なら一時所得

(保険金―掛けた保険支払い額Ⅱ一時所得)

④ 「被保険者」は故人、「支払者」配偶者、「受取人」子供なら生前贈与

・対象者名義の預貯金(存命中に定期解約、ATMで引き出せる準備)

・有価証券などの確認(名義変更の方法も相手先に確認しておく)

・配偶者に厚生年金があれば遺族年金を含めた年金支給額の確認

※社会保険事務所に予約し夫婦で行けば、各々の年金を計算してくれる

・金融機関からの借入金の確認

・連帯保証人になってないかの確認

・多少でも財産があるなら「自筆証書遺言」をしておきましょう

① 財産目録以外は全て自分で書く必要があります

② 法的効力はありませんが葬式についても記載できます

③ 遺言書は三千九百円で法務局に預けられます

④ 死亡時から遺言書は発効します（家庭裁判での開封無用）

我々の経験則で言うとな数百万円から一千万円代くらいの預貯金を残し、子供達全員が結婚してる状況が骨肉の争いになる確率が高く、血族の争いは他人同士より始末が悪いのも特徴です。これは法律の問題もあって、生前故人の面倒を看たか、看なかったかに関係なく、子供達は同等の権利を持っている為、普段は近寄りもしなかった人のほうが騒ぐ傾向にあります。子供達に争って欲しくなければ、遺言書の中で誰にいくら、誰に何をと明確に書き記すことです。但し、仮に三人の子供がいて、長男に全てを残すと明記しても他の二人の子供達と配偶者には『遺留分』と呼ばれる相続権利があり、遺言書より上位に位置する為、例え財産はやらないと書いてあっても主張すれば受け取れる権利分です。遺留分の権利があるのは、常に相続人の配偶者、第一順位の子供（孫）第二順位の父母（祖父母）まで、第三順位の兄弟姉妹に遺留分の権利はありません。それぞれの遺留分を記しておきます。

『※遺留分とは』

被相続人（故人）は自分の財産を誰に、どれだけ相続させるかは自由で、その為にあるのが遺言書制度です。しかし、もし家族には内緒で認知している愛人の子供に全財産を与えると遺言した場合、配偶者や子供達の生活に多大な影響を与える事にも成り兼ねません。そこで第二順位までの法定相続人を対象に最低限貰える財産を法律で保障した『遺留分制度』があります。

仮に愛人の子供に全財産を相続させると遺言書に書いてあっても、法律で決められた比率で支払い請求できます（配偶者と子供二人の場合）

- ① 配偶者（全相続財産の四分の一、遺留分として保障される）
- ② 長男（全相続財産の八分の一、遺留分として保障される）
- ③ 長女（全相続財産の八分の一、遺留分として保障される）

先ほど書いたように兄弟姉妹に遺留分はありません。こうしてみると一般的な感覚では近い思われがちな兄弟姉妹ですが、法的には遠い関係と言えます。

とにかく死亡する前に一時金も含め全ての収入や預貯金を計算しておくことで、使える現金が明確になり、次項の生活費用の目安も試算できる為、死

後に使える金額の目安も得られる事、逝去後すぐに効力を発揮する自筆証書遺言を法務局に預けておく事で、葬式を託す人物も記載でき、遺産分割内容も明確になるので、自然と無理の無い葬式に落ち着き易くなるだけでなく、前項の依頼葬儀屋（明確な料金含む）も決まっていれば、その後は死後について一切心配することなく、全ての時間を配偶者や大切な人達との別れに費やせるし、残る人達も余計な心配をせずに済む為、最後の最後まで対象者に対し温かく接することができる唯一の方法でもあります。

・死後の生活に掛る費用の概算確認（預貯金の引出し残も試算）

前項の続きとなる後に残る家族の生活費の算出です。まず年金ですが、配偶者の年金はあっても遺族年金だけですから存命中のほぼ半分になってるはずです。しかし電気水道光熱費に変化はありませんし、食費もさほど変わらないので、単純に今までの半額の収入で生活する事になると思っ間違ありません。また加齢に比例し医療費（投薬）の費用は増える傾向になります。今までの半額に近い収入での生活と考えれば、葬式で見栄を張ったり、無理

したり、世間体を優先している場合でないのは容易に理解できるでしょう。場合によっては生活できない計算になる事もあります。だからこそ、夫婦が揃って元気なうちに独居になった際の生活も考えておく必要があります。もしもの時、相談するなら市役所より地域包括支援センターがお勧めです。

・施設入所が必要になった場合の月々の支払い額と収入との差額

更に考えておく必要があるのが、独居で生活が大変になったり、認知症の傾向が出てきた場合など施設での生活を考えなくてはなりません。但し特別養護老人ホームは、介護度三以上（生活全てに介護が必要な状態が介護度三ですから、ほぼ寝たきり状態の事です）と入所は難しく一般施設になると、月額十五万十おむつ代が基準と想ってください。しかし施設入所費用の全額を年金で賄えず預貯金の切り崩しとなるケースも多いですから元気なうちに施設を調べておくのも一考です。

個人的な感覚ですが、特養は数百人待ちが普通で順番を待って入れる状況ではありませんから、ショートステイを利用しては如何でしょう。一泊だけ

の施設理由を何度も繰り返して、ショートステイの最大日数も利用して、対象者が、暴れたり、暴力を振るったり、暴言を吐いたり、徘徊したりなど面倒の無い人物であると施設担当者が分れば、比較的早く入所できる気がします。その意味では我が俣で横柄な家族も振るいに掛けられるでしょう。この辺りは自分が働く立場だったらと考えれば当然だと思います。

また家屋敷など不動産がある場合、施設によっては不動産担保で受け入れてくれる所もありましたので、夫婦が元気なうちに利用可能な施設の心当たりだけでも絞っておき、不動産の活かし方も含め夫婦や家族で話し合っておきたいものです。

・墓がある場合、墓閉じをする必要の有無と総額費用

墓がある場合、墓には祭祀継承者さいしけいしゅうしやという決まりがあり、次の順で墓守する人を決定します。

- ① 前の祭祀承継者の指定（遺言、口頭指名など）普通は法定相続人の誰か
- ② 慣習、かつては全財産長男が受け継いだなごり（親族会議で決める）

③ 家庭裁判所、①②で決まらない場合、家庭裁判所に申し立てする

見て分るように、これが駄目ならあれ、あれも駄目なら家裁と、ようするには誰かに墓守させるといふ事、事実、家庭裁判所から指名されたら拒否できない。この現実を踏まえて考えると、時々、寺の墓所で無縁墓になってるのを見ますが、墓の使用権を購入する際、大抵の墓は二年〜三年放っておくと墓を撤去しますみたいな覚書や、契約書の一文はあるでしょうから、何年も管理費も払わず、放っておいた墓を寺が石屋に依頼して壊し、永代供養墓に入れた総額を請求する事は可能だろうと思えます。このケースで裁判になったら、祭祀承継の法律から言えば寺が勝ち、多額の支払いをさせられる可能性は否定できません。だから、墓守不在の状況が分かった時点、できれば現役で収入があるうちに墓閉じする事を強く勧めます。理由は配偶者が仮に癌で入院して余命数ヶ月だとしても年金があり、入院費を払ってもいくらか残る可能性があり、それを墓閉じ費用として貯めれば、さほど足さずに閉じられる事もあるからです。また、当方の実例では一般葬儀社で百万円の家族葬は十五万円ですから、家族葬をしても差額の半額ほどで墓閉じと遺骨処

理まで可能となる。葬式だけで考えるのではなく、対象者に関わる全てと、残る家族の生活も含め、将来に至るまでの全てを考えた上で決めると良いでしょう。『賢い墓の閉じ方』は後述してありますのでご確認ください。

「葬儀屋についての不思議」

・葬儀屋は靈感商法、誘導商法を駆使した儲け主義の商売人

夫婦や家族間で、これから先の話しをすると必ず突き当たるのが『死後に掛かる費用』、その最たるものが『葬式代』です。十四年間葬儀業界にいますが、葬儀屋に対する印象は十四年前も現在も全く変わりませんと言いたい所ですが、業界知識が増えた分、より不信感は強くなっています。葬儀屋も普通の商売ですから――、と言う人達もいますし、大方の見解はそうなのでしようが個人的にはそう思えません。理由はどんな商売でも「嘘」や「靈感商法」を使って利益を得るのを商売とは言わないからです。

食品を扱うスーパー、家電業界、衣料品業界、外食産業などは分り易く、

『より良い物をより安く』と消費者ニーズを満たす為、仕入れの努力をし、経費の削減を推進し、薄利でも可能な経営戦略を立て、末端の消費者にとって良い店を目指し続けています。まあ、そのせいでメーカーや問屋は思いきり値切られるでしょうから業界内での評判は最悪かもしれませんが、それが嫌から取引をしなければ良いだけの事、でもそのお蔭で末端の消費者は安く良い物が手に入る恩恵が得られ、多くの人達が来店する事で経営が成り立つという好循環を目指して日々努力しているのですから、間違っても消費者から見放されるような嘘や誤魔化しを続けることはないのです。

ところが「死」を扱う葬儀業界と宗教界だけは違います。過去の経験を思い出してみれば分ります。葬儀屋は言います。

- ① 「最後ですからね、こうしてあげれば故人も喜ぶし供養になりますよ」
 - ② 「普通は、こちらに変更される方が多いです」などなど――、
- 寺の住職は言います。

- ③ 「読経を唱え、戒名を付けなければ、あの世で浮かばれません」
- ④ 「お釈迦様の弟子になるのですから戒名は必要です」

これらの言葉を良く見てください。根底にあるのは『脅し』です。分らな

ければ言い方を替えれば理解し易いでしょう。

① 「こうしなければ故人は悲しみ供養もできません」

② 「変更しない家族なんて殆どないですよ」

③ 「故人があので浮かばれなくても良いのか」

④ 「戒名付けなければ弟子になれないよ」

いかがですか、脅しの商法が見えたでしょうか、これを利用した商売なら、『子供の教育産業』『健康関連産業』『保険業』そして『葬祭業』さらには一部の『宗教』です。但し、子供教育、健康産業、保険業には根拠や保証があるのに対し、葬祭業と宗教に証明できる根拠はなく、何でもあり状態です。だから靈感商法と誘導商法だと言うのです。

故人の供養だと言う葬儀担当者、浮かばれないと言う宗教者に言いたい。

『あんな死んだ事あるのか？』これが全てです。なぜこう言うか――、

仏教徒は仏教徒専用のあの世があり、キリスト教のあの世もあり、イスラム教、ヒンドゥー教にも、それぞれ、あの世が無ければ成立しないと云つてゐるわけですが、百歩譲って、それぞれに、あの世があつたとしても良いし、見た事の無い僕は知らないのですから肯定も否定もしませんし、どちらかと

言えば、純粹に信じておられる方々を否定したくはないのです。それが生きる指針となり、人様に迷惑を掛けないのであれば我々にできる事があるなら応援したいくらいで、完全無信仰者ですから、宗教を差別することなくできる範囲の応援をしてきた自負もあります。

なのに、今の葬儀屋と葬式坊主は、さもさもらしい事は言うし、偉そうなことを言った後から『高額費用』が付随してくるから信用できないだけです。この感覚は大多数の日本人が持つてるもので僕が特殊ではありません。多分葬儀屋が世間からどう思われているか、坊さんがどう言われてるかくらいは分ってるんじゃないかなあ、それとも裸の王様なのでしょうか？

葬儀担当者はサラリーマンが多く、自分の地位や収入の為に家族から絞れるだけ絞ろうとし、寺の住職は葬式には軽自動車で行くが、車庫には高級車が置いてある――、こんな話しを聞いた事ありませんか？ 全ての寺がそうではありませんがねこの手の話しは全国的にありますから個の問題でなく、『火の無い所に煙は立たない』です。

勿論、葬儀屋も住職も生活に必要な金は稼がなければ生きていけません。それは、あんしんサポートでも全く同じです。では何が違うのでしょうか。

『吐いた言葉の本気度の違い』これに尽きます。

あんしんサポートには、自然に生まれた理念、信条、目的があります。

理念『誰もが死後費用の心配をする事なく生きられる世の中にしたい』

信条『葬儀は大事、でも残る家族の生活はもっと大事、だから絶対に無理を
してはいけません。無理はさせません』

目的『事前相談後は、死後についての心配は一切する必要はなく、自分なり
の人生を精一杯楽しみ、精一杯生きられる』

これらを本気でやろうと思えば、自分の持てる時間、体力、能力の全てを
全力で掛けなければ成し得ません。分り易く言えば、できる限り低料金で、
誰が見ても違和感の無い追加の要らない葬式設定をし、その時点の財布事情
と今後の生活も考慮した上で、個々の家族に最適な葬式を組立施行するだけ
でなく、人の死に際し発生する様々な手続きの知識を有すだけでなく、それ
を伝える為に数時間を要しても追加せず、あんしんサポートがあるから、代

表や千明さんがいるから安心して過ごせる。と思える言動を続け、信頼に足る人物、支援センターであると多くの人に認識して貰える日々を生きる事。

しかし葬儀屋の言う供養、故人への思いには、全て超高額な必要が付随し、住職がする法話の多くは追善供養を促す内容も多く、これまた費用が掛ることばかりで、自分の人生の全てを掛けてるようには到底見えませんし、掛けてはいないでしょう。根底にあるのは全て『自分』なんです。人は馬鹿ではありません。少なくとも葬儀屋、住職程度の頭脳は持ち合わせていますから、いつまでも誤魔化せるはずがないのです。それは今の評価だと思って良い。

・本項の結論

仏教が悪いわけではなく、人の死後を家族に代わって弔う葬儀屋の存在、どちらも否定するものでなく、世の中には必要なものだと思う。ただ現行行われている葬式の在り方、葬式に携わる担当者や宗教者の現実に行っている言動や思考には相当問題があると言いきれる。

葬儀屋、葬式坊主は確かに商売でしょうが、他の職業とは一線を隔します。結婚式をしない人生、子供を産まない人生を始めとし、人生の全ては『する』『しない』の選択ができます。ところが『死』だけは自死を除いて選択権がなく、この世に生を受ければ百パーセントの確立で終幕を迎え、死は大多数の人にとって最大の恐怖ですから「死」を利用した商売は倫理上タブーです。

・死後の火葬だけは行政が行う最後の福祉であるべき

本来なら人の死後は焼骨にするまでは行政が行うべきで、この段階までは全国民が同じなら間違いなく平等な福祉であり、死後費用の心配だけはせず生きられます。焼骨になってから、派手な葬式をしようが、何もしなからうが、残る家族の好きにさせれば良いだけの事、これを国費で賄えないなら、成人した月から二十年間、毎月三百円の火葬税を掛ければ七万二千円になり火葬できます。もし、十年で死んだら半額負担すれば良いし、子供達の為に親が生れた時から積立しても良いシステムで良いし、途中で転居したら、転居先に移行すれば良いだけの事です。このシステムは簡単にできます。

しかし今の政治ではそんな気配は微塵も有りませんし、ただ待っていても何一つ進みませんから、千里の道も一歩から――、の精神で葬儀業界に一石を投じた十四年前から、弱者中心の葬儀支援を続けているのです。この辺りまで来ると、葬儀屋と葬儀支援の違いがある程度理解して頂けてるでしょう。

・利用者は確認できない搬送距離で追加

ここからは、胡散臭い具体例です。葬式項目の中に絶対ある「病院施設から安置所までの遺体搬送」この項目が無いパックは論外です。この死体搬送、十キロメートルまで、二十キロメートルまでと走行距離が指定されています。距離測定は「車庫」↓「病院」↓「安置所」までの合計距離で、十キロメートルなら、近所の病院、近所の葬儀屋でもない限りは追加必須の内容です。そもそも『追加必須』って変でしょ？　せめて二十キロメートルまでの記載なら納得はできなくても理解はできます。この点は霊柩車許可を取得しようと思った時点で変だと思ひ検討した結果、地域料金設定にしたわけです。

①『旧前橋市と隣接地域』②『その他県内全域』の二種類だけにし、①の地域は例え五十キロメートル走っても追加は一切不要、②地域は追加一万円十

税としました。霊柩車の許可は一般貨物自動車運送事業、いわゆる運送屋さんですが、管轄する国土交通省は遺体搬送は葬式とは別に利益を得る事業という考え方ですから緑ナンバーです。これに対し建築現場に資材を運ぶのは白ナンバーで良いとの見解ですが、僕は遺体搬送は葬式を引受けたら当然、搬送だけで利益を考える事は無いと距離計算では無く、規定地域内は距離不問、一回分という発想の設定です。

・「最後ですから、」故人はね、でも家族はこれかも生きてくんだよ

どこの葬儀屋でも口にするのが前項でも書いた「最後ですから——、」だと教えてくれたのは利用した家族です。うちでは使わない言葉ですから、

「最後ですから——、って何が最後なの？」

と聞く僕に家族は、

「故人の最後だから、できるだけの事をしてあげては——、って事みたい」

「あー、故人の最後かあ、でも家族はこれからも生きてくじゃん。死んだ人より生きてる人が優先だと思っただけなあ、故人がして欲しいって言った訳でなく家族の希望でもなく、葬儀屋の売上を増やしたいだけでしょ？」

「結局そうなんですけど、うるさい親戚に訴えるんです。ほんと腹が立つ」
葬儀屋って今の利益最優先なんだろうな、その為の霊感商法と誘導商法なのさえ分らないし、それを許して来たのは消費者なだけだね。ホームページとか、パンフレットを見れば各パック毎に使用する物全ての写真、内容、料金、追加条件、地域などが詳細に明記してある葬儀屋は見たことがないけど、それでも通る業界なのが不思議、そのうち通らなくなるけどね。
・ドライアイス毎日入れ替えの不思議

これは最初に目撃した瞬間から疑問に思った事、でも家族は何も感じないみたいでしたが、安置した翌日になると葬儀屋が来て、

「ドライアイス入れ替えますね」

「あ、お願いします」

この会話変じゃねえ？ 「ドライアイス追加しますね」とか「補填しますね」なら分るけど「入れ替える？」って何だ？ ドライアイスは二キログラムから、二、五キログラムの塊りで、時間が経てば小さくなるけど、小さくなくてもドライアイスで氷になるわけじゃない。例えば、安置時点で十キログラ

ムのドライアイスを当て、翌日全て半分になってたとすると残量は五キログラムでしょ。なら半分を二つ一緒に包み直せば、当てた部分は凍結してるから二包み追加すれば済み費用も節約できます。また翌日火葬なのにガッツリドライアイスを入れる葬儀屋が多いけど、身体の芯まで凍結させたら解凍までに二十四時間近く掛かるから、前日入れる必要はない。ドライアイスが残ってたら、火葬炉に入れる前に外す決まりだし、凍結してたら火葬時間も長くなるし、ドライアイスを外したからと、すぐに腐敗するわけでもない。ついでに言うくと布団安置の顔の左右にドライアイスを置く葬儀屋が多いけど、ドライアイス減らし作戦？ としか思えない。ドライアイスは直接当てた部分か密閉された狭い空間（納棺状態でフタを閉じる）なら冷やせるが、布団の上で顔の横に置いてても効果はない。嘘だと思うなら、綿で包んだドライアイスの横に手を持って行けば分る。手は冷たくならないだろう。この現実だけ見ても充分胡散臭いでしょ。

「葬儀屋の言いなり防止に必要な知識」

・知っておくべき死体の知識

ドライアイスの話が出たついでに、葬儀屋の言いなりで好き勝手に追加されない為に必要な程度の知識を書いております。どこかで葬式があったら役立つでしょう。それにしても、こんな事まで書かなければ家族を守ってあげられない葬式の実態が大問題だわな。

・死後硬直

死後硬直という言葉は聞いた事あるでしょう。僕自身の経験談で書きます。通常の逝去であれば身体の中で初めに硬直が始まるのは「顎^{あご}」、死後二時間くらいかな、それから手足で死後四時間くらい、硬直のピークは死後二十四時間くらいで、そこから解硬^{かいこう}が始まり、おおよそ七十二時間ほどで硬直は解け、九十時間後には全身の硬直が解けてると思う。最近減りましたが、病院、施設で故人の手を合掌^{がっしょう}に組ませたら、安置時点で一旦外せば冷却ムラに成り難く、最も腐敗の速い、腹部、下腹部がしっかりと冷却できる。必要であれば再度合掌を組めばいい。稀にお湯で硬直を取ろうとする葬儀屋もあるが、腐

敗を促進させるのでお勧めできない。

ドライアイスは『腹部』『下腹部』は必須、故人の状態により『胸部』と室温の高い部屋や安置日数が四日以上と長い場合『頭部（頭の下）』にドライアイスを置けば、脳の腐敗と顔の黒ずみを遅延させられる。更に死体搬送シートは『安定枕付き』が望ましい。特に長距離搬送の場合、安定枕付きであれば故人の頭部が揺れず安定したまま搬送できる。

・腐敗の進行と臭い

死体を放置すれば必ず死臭ししゅうが発生、初期段階の腐敗臭ですから、誰でも同じ臭いと思っ**て**いい。また一旦死臭が始まったら完全凍結する以外に臭いを取る方法はない。確**実**なのは腹部の完全凍結、凍結時肌は黒ずむが解凍すれば戻るし、家族は見えない部分だから建前より**確**実を優先したい。また腐敗の進行により顔や身体の色は変化する。初めは黒ずみ、更に緑色や赤色になるが、この段階に入ると見た目も酷くなるしマスクをしても鼻をつく強烈な臭いがする。更に時間が経つと発酵したような臭いになるが、この段階まで来ると身体の水分は出て軽くなりDNA判定が必要となる。孤独死でよく見

られる状態ですが、冬場で暖房が無ければ十日間でも、さほど腐敗は進みませんが、六月頃の陽気になると、高温多湿の為、死後一週間経過した死体は素人さんに見せられる状態でなく、蠅が卵を産み大変な状態にもなる。これらは全て実体験で得た知識だけに、保冷剤の当て方、必要使用量など事前に分る程度のスキルは欲しい。また独居生活者に対しては、日々連絡を取ることで死は避けられなくても、凄惨な死体になる事だけは防げるだろう。

・状況により脳の腐敗を防ぐ

先程は簡単に述べたが、脳の腐敗臭は身体の腐敗臭の比ではないほど強烈ですから、絶対に避けたい事で、特養での経験を記すので参考にして欲しい。

父親がいよいよ危ないと、最終的な相談にきた会員の話の中、その特養に医者は待機してないと聞き、

「例えば、午後七時逝去したら翌日の朝まで放っておかれる可能性もあるし、もし現実になったら間違いなく腐敗臭が出るから、その時はアイスノンみたいな保冷剤か、ビニール袋に入れた氷を肌に直接当て、数時間毎に交換して貰うよう葬儀屋に言われたと確実に伝えておく事」

と伝えましたが、翌日来て、

「言われた通りに伝えたら、我々は法律で死体を触れない事になってるからできませんって言われました」

「はあ？ そんな馬鹿げた話に納得したの？ なら、もし腐敗臭がしたら責任持てるのか？ って強く言ってして貰わないと責任もてねえぞ」

その家族は、結局強く言えなかったようで、そのまま逝去の連絡が入ります。ところが搬送は医者が来てくれる数時間後だと言うので、事前に伝えた事を改めて伝えました。ところが予定の時間が来ても搬送電話が来ませんので、こちらから家族に電話すると、医者が来れず施設の車に乗せて死亡診断してくれる医者に向かったという——、この言葉を聞き嫌な予感がします。

それから数時間後、ようやく搬送依頼の電話が入り、指定先特養に行く以案の定、死臭だけでなく脳の腐敗臭もしている状態——、腹が立って怒鳴り掛けましたが、家族が黙っているのに怒鳴れません。あんしん館に着くと、「今から身体と脳を凍結させるけど、それでも臭いは取れないと思う。だからあれだけ言ったのに——、その点は覚悟して貰うしかないよ」

「はい、分かりました。、宜しくお願ひします——、」

頭部の凍結は顔の凍結もあるので限界があり、結局腐敗臭は完全に取れず、湯かんの時は小天香しょうてんこうと呼ばれる、葬式で僧侶が使う四十センチ位の長くて太い線香を灯し、線香の臭いで誤魔化すしかありませんでした。

法律には沢山の矛盾があります。例えば後見人の仕事は逝去まで、ですから死後の手続きは本来法律違反です。しかし、それを鵜呑みにしてたら誰が死後の手続きをするのですか？ 最近では死後手続きまではできる事に成りましたが、特養の一件もこれと一緒にです。死後は触れないからと何もしない施設などありませんし、この施設は結局、自社の車に乗せて搬送したのですから、普通の施設以上に触ってるし、死体に触ったからと罰せられる事は絶対にありません。ついでに言うと、施設で死体に対し「寒いよねえ」と布団を掛ける姿をよく見ますが介護士は死体について素人、看護師は患者には当然プロであり死体処置もできますが、死体の腐敗変化や対処は素人に近いです。よく『餅は餅屋』と言いますが、結局、その道を究めた人だけが専門家と言えるスキルを要しており、葬儀屋は全てプロではありません。

・死化粧はいつ、誰がするの

適切な死体処置をした安置が済めば、家族が思うのは故人の見た目についてだろう。死化粧、口閉じ、目、入歯などの知識も書いておきます。基本的には『家族の心が穏やかになる故人の見た目』ですね。ドライ、死後硬直などは本来なら葬儀屋がしっかり持っていれば、家族は知らなくて良いスキルですが、ここからは家族が知ってたほうが良い部分です。

- ・死化粧は二つに大別できます

① 女性（人）として綺麗にしてあげる

多くの女性は普段から化粧しており、最後まで綺麗にして送ってあげたいと思うのは極自然な感情です。男性も入院が長いと髭も生えています。

- ・死化粧するの女性の故人が基本、家族自身の手で化粧しましょう。
- ・搬送直後なら肌の温もりがあり化粧品しやすい
- ・故人が使用してたもので化粧してあげましょう
- ・ファンデーションは液体、又はクリームタイプが使い易い
- ・髪を整えるブラシやコームも必要、整髪はムースが便利

- ・化粧品が無ければ百均でも買えます
 - ・故人がおしゃれな人だったら、マニキュア、ペディキュアもあり
 - ・男性なら髭剃り、T字型のカミソリとシェービングフォーム
 - ・入院で白髪が出てたら、塗るタイプの白髪隠しもできる
 - ・伸びた手足の爪を切ってあげるのも良い
 - ・帽子が好きな故人なら被せてあげたり、好きな服を着せてあげても良い
- ② 誰も見られる死体にする
- ・安置日数が長い、黄疸で顔が黄緑、うっ血で顔が赤紫色などの修整化粧
 - ・自分でするなら、いつもよりかなり濃いめに化粧します
 - ・黄疸、うっ血はコンシラーで顔全体と首までしっかり塗ってから化粧
 - ・死化粧料金を見て決めると良いでしょう（数千円〜数万円まであり）

僕の場合、基本①は家族、②は美容師に化粧を教えた僕が行います

- ・口閉じの仕方（入歯）

病院等でエンゼルバンドをしてくれたり、タオルを丸めて顎に挟んでくれたりしますが、どちらもしつかり閉じることはできません。エンゼルバンドでは、安置してる間中ずっとしたままになり綺麗ではないし、肌に痕が着きお勧めできません。口閉じ専用の『チンカラー』がベストです。全ての葬儀屋が持つてる訳ではありませんが、ご遺体は口と目が閉じていれば穏やかな寝顔になり、家族の心も穏やかになります。但し、長い期間ずっと口を開けた状態でいた場合、開いた状態で固まっております閉じられません。その場合は、口の上に顔当て布を置いて、更に掛布団で抑えておきます。癌などで痩せてる時は、左右の頬に含み綿を入れ膨らませる事も可能ですが、できれば顎が完全硬直する前に対処して貰いましょう（費用は確認したほうが無難）

入歯は死体処置の際、病院で入れてくれますが、時々入らないこともあるようです。しかし僕の経験で入らなかった事はありません。もしかしたら看護師より葬儀屋のほうが入歯を入れるのは上手かもしれませぬ。また顔のシワは無くなるか薄くなりますから女性は安心してください

・開いた目の閉じ方

薄っすらと開いてる程度なら、何度も手で閉じてあげれば閉じる事もあります。閉じて少し経つと薄っすら開く時は、上下の瞼をテープで止め、一晩置けば結構な確率で閉じてくれるでしょう。

もしカッと見開いた状態なら閉じませんので、両目の上にガーゼ等に乗せ両面テープ等で両端を止めましょう。

・水分で膨らんだ手は合掌とエンゼルバンドを外せば水は引く

個人的にはどうかと思うのが、逝去まで点滴を続ける病院が多い事です。

人も生き物で他の動植物と一緒にです。人間以外の生物は『枯れる』の言葉がピッタリの死に方をします。植物はそのままですが、動物は死を察知すると群れから離れ死に場所を探す動物も少なくありませんし、魚類では鮭のように雄雌ともに海から川に上り、上流に辿り着くと最後の力を振り絞って子孫を残し息絶える――、人間も枯れて逝くが一番自然だと思うのですが――、

ところで病院や施設からの搬送で多いのが手を合掌に組み、エンゼルバンドで締め付けてあり、点滴液で指や手の甲がパンパンに膨れている故人です。

なぜか葬儀屋の多くは、そのままドライアイスを当てますが理解出来ません。この状態での安置は二つのリスクがあるからです。

① 絶対冷却が必要な腹部と下腹部にしつかり当たらない可能性がある

② 水膨れの手を凍結させると破裂する可能性がある

一旦エンゼルバンドと合掌を外し、両手は身体に沿って置けば下腹部、腹部、胸部は完全に見える為、仮に故人が痩せて骨が浮き、腹部がへこんでる場合でもドライアイスの処置が正確にできるし、身体に沿わせて置いた両手の水膨れは時間とともに小さくなり、二十四時間後にはいつも通りの手に戻る可能性が高いです。また水泡を破裂させる事ありません。仏式の湯かんで合唱が必要なら、湯かん直前で組めるし、水が引いてくれたら家族の心も穏やかになります。湯かんで皮膚が柔らかくなったら、手足を拭く際は力を入れず軽く拭いてください。もし水泡が破裂したら布団はびしょ濡れ使用不可能となります。ここまでの項目をしつかりやれば穏やかな故人でしょう。

・六尺棺に百八十センチの故人を納める

一般的に皆さんが目にする棺の大半は六尺棺（内寸百八十センチ位）です。故人の足先が伸びてたら、身長十足の大きさとなり六尺棺では納まらないですから、葬儀屋は六、二五尺、もしくは六、五尺の棺を用意するでしょうが、結構な価格差で販売してる葬儀屋が多いです。

『山型フタ付六尺白布棺』あんしんサポート一万九千円（税込二万九百円）多分、皆さんが最も見慣れてる棺で、違和感を感じない棺だと思いますが、この棺、県内でも高い所は十五万円、十万円程度ならいくらでもあります。どちらも同品質で同じ物と言っても問題ありません。ところが、六、二五尺、になると数万円高くなり、六、五尺なら倍額になる葬儀屋もあります。確かに仕入れ単価を見ると六、五尺は三、五倍と高くなりますが、売価設定は各葬儀屋の自由で家族も全く分らないし相場などありません。一万円と言われても、十万円と言われても『そうなんだあ』葬式で使用する葬具は全てこんな感じですから単価確認は必要です。

「棺」は故人と一緒に火葬するものであり、火葬した焼骨はバラバラになるので基本的には身体が棺に納まっていれば問題ありません。あとは家族の

考え方次第ですけど、棺のサイズを変更する前に差額確認は必須です。葬儀屋によっては倍額もあり十万円が二十万円って事だっているのです。

そこで棺のサイズを変更せず、身長の高い故人を入れるテクニックです。最善なのは初めから納棺状態での安置、身体は硬直してませんから、膝を曲げた状態で納棺、身体には棺用の布団を掛けるので分りません。

布団安置の場合、安置の時、棺に入る身長になるまで膝の下に座布団など入れ膝を曲げた状態で安置、膝は開かないよう紐で縛っておきます。曲げた膝の分だけ盛り上がりますが、身体にもドライアイスが乗るので全体の高さには違和感はありません。最近の例で言うと、身長百七十数センチ、体重百三十キログラム程の大きな故人でも『山型フタ付六尺白布棺』で間に合いましたので、家族目線の葬儀屋なら大きな棺はそれほど使用しないでしよう。

・山型フタ付棺を使用する葬儀屋に依頼すべし

棺については、誰が見ても違和感が無いのは『山型フタ付白布棺』です。

我々が子供の頃は『しらきひらかん白木平棺』と呼ばれ平らなフタの棺で、フタ閉じには石

で釘を打ち付けましたが、今見るとやはり違和感は拭えません。他の葬具はどうでも、棺だけは全ての人が見るし、最も違和感を感じ易い物でもあり、少し太った人が合掌を組むとお腹の上に来る為、平らなフタだと閉じない事があります。それが山型のフタにしてある理由です。パフレットやホームページで『棺』に安心せず、実際に使用する物の現物か写真で確認、できるなら『山型フタ付白布棺』を初めから使用する葬儀屋にすべきです。

・女性 は安心、シワは伸びる

納棺以降、故人で見えるのは首から上、特に顔の部分だけです。女性ならシワ、シミが気になる所でしよう。シミはコンシーラを使う以外は隠せませんが、シワは伸びますから安心してください。

理由は『皮膚の緊張が無くなる事』と『引力』です。死亡すると細胞の緊張が解けダラーとし、皮膚は重力で下に下がる為シワが無くなるわけです。

死ぬと顔が青白くなるのは血液が全て身体の下に溜まるからで身体の下側はうっ血します。うっ伏せで亡くなった故人の顔が赤紫にうっ血するのはその為です。一旦うっ血すると、血液が流れませんから元には戻りません。う

つ伏せで倒れていたら、早い段階で仰向けにしてあげると良いでしょう。

「宗教儀式について」

葬儀屋、死体の知識、葬儀使用品の一部など書いてきましたが、葬式にどうしても欠かせない話として、宗教（信仰）と宗教儀式があります。

・信仰（宗教）ってなんですか？

ここから先は『基本無信仰者』向けに書きますので、先に申し述べておきます。無信仰、この感覚を持つ日本人は多いはずです。宗教、信仰の言葉は知ってても実感ない人が多いのが日本人です『えっ、それはないでしょ？』と思うかもしれませんが、それが多くの日本人なのです。あなたに子供がいたら、次の質問に答えてください。実体験の無い人は感覚で答えてください。

① 子供が生まれて最初に連れて行ったのは何処ですか？

② 七五三で子供の手を引いて行ったのはどこですか？

③ あなた自身の結婚式は仏式、神式、教会式のどれですか？

①の答えは『神社』ではありませんか？

②の答えも『神社』ではありませんか？

③の答えは『神前式』か『教会式』或いは『人前式』ではありませんか？

これらは信仰でした事ですか？ 少なくとも八割以上の人は違はずで、昔からの慣習と、子供が元気に育って欲しいと思う親心だったり、教会式の人にはウェディングドレス、長いベール、バージンロードなどへの憧れからではありませんか？ いわゆる宗教や信仰に沿って——、ではないでしょ？ でも、それが日本人の普通ですから全く問題ありませんし、無信仰者だからキリスト教信者でも無いのに教会式が堂々とできるんです。もし、あなたに厚い信仰心があつて、キリスト教以外なら教会式は絶対にしていません。

信仰とは人生をどう生きるかの指針であり、人生の過程に『結婚』『出産』『終幕』もあるので、信仰に沿った事をするのが当たり前です。そう考えると仏教信仰があるなら『仏前式』で当然、更に仏前式は他の結婚式と比

べて比較的費用は掛からず、高いからでもなく、単に仏教の信仰は無いだけの事、しかし葬式になった途端仏式となるのが日本人の不思議です。

先の『結婚式』『お宮参り』『七五三』『成人式』『葬式』に至る全てが信仰、セレモニーでなく、イベント的感覚、それが日本人ですから、葬式だけ信仰だ宗教だと言われても、人生の生きる指針として仏教が存在してないのですから、理解できるはずもなく、だから布施が高い、葬儀屋が高いと素直に思える感覚は間違っています。

あなたや家族に厚い信仰があるなら、全ての節目は信仰に沿うのが自然であり当然ですが、厚い信仰がなければ、どんな節目であろうとも宗教儀式は無用——、誰が考えても当たり前のこと、それを具体化しているのが、あんしんサポート葬儀支援センターというだけの事です。

・仏教信仰がないのに仏式の葬式は間違い

信仰心が無いのに宗教儀式をすることのほうが変だし不思議でしょ？ それでもさほど費用が掛らないのなら、それも有りかとも思えますが、宗教者

謝礼が最低三十万円、普通で五十万円から六十万円、高い所は百万円を超えるのですから、まあ良いかと言える金額ではありません。更に仏式の葬式は高額な供物類が多過ぎます。砂糖盛りが一万円以上、回転灯籠も一万円以上、などそれらを供える理由は？ と聞けば供養になる——、と言う。何がどうなって供養になるんだ?? 葬式商売の何ものでもありません。

無信仰の葬式って何をするの？ 的な疑問が出る人もいるでしょうから、回答から書くと『何もしない選択』もあれば『何でもありの葬式もできる』これが無信仰の良いところです。これじゃ意味不明ですね——、例えば、

① 『お別れだけの葬式』

- ・ 病院から搬送直後、納棺安置
- ・ 翌日は一日お別れの日とし午前十時～午後七時までお別れタイム
- ・ 花を入れたり、好きな服や食べ物を入れたり、線香を供えても良い
- ・ 翌々日は、朝一で火葬すれば午前中に終了

② 「何でもあり葬式」ちよつと無理矢理ですが——、

- ・搬送後、布団安置、末期の水をとり、線香を供える
 - ・湯かんは、烏帽子と袴で神事の湯かん
 - ・僧侶による枕読経
 - ・お別れの時間に、アメージンググレイスの合唱
- ②は無理矢理間ありますが、①②ともに全て宗教儀式として行っている訳でなく、家族がしたい事をしてるに過ぎず問題は無い。事実①に近い葬式はよく行います。葬式の内容は次の二点で決めています。
- ・その時点の財布事情が最優先
 - ・家族が故人にしてあげたい事を取り入れた葬式をする

結論を言えば、特定の信仰が無ければ、葬式に宗教儀式があるほうが変で、『お別れの時間』と『火葬』だけの葬式で当り前です。この点はサラッと流さず、しっかり読んで、よく考えたり、家族で話し合っただけの部分です。自分達家族にとって、さほど意味の無い事に多額の費用を掛け、後に残る家族の生活に支障が出るなど絶対あっては成らない——、のは当り前ですよ。

・三十五日、四十九日は納骨をする日ではない

大多数の人達が勘違いしてるのが、三十五日、四十九日は忌明けと呼ばれ、簡単に言うと故人が仏様の仲間入りをする日の事、早い人は三十五日、どんな遅い人でも四十九日には仏の仲間入りをすると言われ、この日に閉じてあった仏壇の扉を開ける地域も多いでしょう。ならば納骨はいつするのか？日本は本来土葬なのはご承知の通り、土葬はいつしますか？ そう、葬式当日ですから、本来納骨は即日です。また最大信者数のキリスト教は遺骨に執着を持ちませんし、散骨が当り前の地域もありますから、無信仰ならあなたや家族が思った通りにすれば良く、遺骨を墓に入れる法律はないんです。

・拾骨で『箸渡し？』後から取って付けた語呂合わせでしかない

多分、あんしんサポート以外の拾骨は箸を渡され、ひとつの骨を二人で挟んで骨壺に入れ『箸渡し』と言われませんか？ こんないい加減な語呂合わせを何故、全国大多数の斎場で言うのか不思議でなりません。

納骨同様、本来日本は土葬でしたから、土葬した遺骨を橋渡しなどできるはずもなく、今もあります。昔は熱いままで拾骨するのが当たり前でした。箸で掴まなければ火傷するから箸を使っただけです。前橋市も以前の斎場では熱いままの拾骨でしたから箸で行ってました。また箸渡しは、橋渡しと同じ音ですから、単純に語呂合わせと考えると良いでしょう。

・ありがとうの言葉を添え『手』でいたい拾骨

このことに気づいてから、あんしんサポートの拾骨は基本手で行います。

また各斎場に行くとき結構適当な事を当然のように言う担当者も多いです。

「遺骨に付着している色は、棺に入れた生花などの色です」

こう言う担当者はとにかく多いですが、生花を入れない家族もいるわけで、内心「えっ？」と思ってるはず。分り易い着色をいくつか話します。

『緑色』

棺を火葬炉に入れる際、コの字型の金属の上に棺を乗せます。この金属の多くはチタンです。理由は軽く、硬く、強く、溶解度も高いからです。ちな

みに鉄の溶解温度は一五〇〇℃強ですが、チタンは一七〇〇℃弱、火葬炉の温度はダイオキシン問題で八〇〇℃以上の決まりがあり、最高一二〇〇℃ですから、チタンが溶けることはありません。火葬炉に火が入ると初めに燃えるのは棺ですから、ご遺体は下に落ちる形になります。その際、熱されたチタンと骨の当たった部分に緑色が付着する可能性が高いです。

『上下顎の赤色』

上下の顎や周辺に赤褐色が付着してたら歯医者の治療痕の可能性が高いと
思っ
て
良
い
で
し
ょう。勿論、花の色が着かないとは言いませんが、花よりは
衣
服
や
着
物
の
色
の
ほう
が
付
着
し
易
い
で
す。

『頭蓋骨内部のオレンジ色』

脳は脂質で毛細血管が張り巡らされている為、血液の色素がオレンジ色で
付
着
し
て
る
可
能
性
が
高
い
で
す。

『黒っぽい部分』

火力の問題もありますが、焦げて炭化した色です

『暗いオレンジ』

腐敗が進んだ焼骨は全体的に暗めの綺麗ではないオレンジっぽい色がつく

『遺骨に色を着けるなら』

真まじつ新あらの木綿で安やすっぽい真まじつ赤なトランクスやワイシャツなど着せて火葬すれば焼骨全体がピンク色に染まります。

「骨の中が粗いスポンジ状なら」

粗ければ、粗いほど骨粗しょう症だと思って良いでしょう

『説明できる焼骨』

・かかと・膝の皿・膝の関節・尾骶骨・骨盤・大腿骨・肋骨・背骨・腕の骨・指の骨・肩甲骨・喉仏（第二頸椎）・下顎・上顎・左右の耳穴・頬骨・頭蓋骨（後頭部は前頭部の倍以上厚い）

『西日本四寸骨壺・東日本七寸骨壺』

西日本は全て拾骨せず、東日本は全骨拾骨の為、使用する骨壺が違う。

『墓の法律・賢い墓閉じ・遺骨・その他について』

・祭祀継承者

民法・第八九七条（祭祀に関する権利の承継）祭祀継承者の決定方法は次の

三通りで①②③の順です。

①被相続人が指定した者が祭祀承継者になる

②慣習にしたがって祖先の祭祀を主宰すべき者が祭祀承継者になる

③家庭裁判所が祭祀承継者を選ぶ

※祭祀継承者は法定相続人で無くても遺言書で指名でき、最終的に話し合いで決まらない場合、家庭裁判所が指名した者は拒否できないとなっています。
・賢い墓閉じの仕方

①墓を撤去して更地に戻す費用は最低でも三社から見積もりを取りましょう

※依頼先により最大十倍差まで経験あり（五十万円対五百万円）

②カロート（墓の中）内にある骨壺、遺骨の量を数えて貰う

③出した遺骨は散骨又は永代供養墓納骨などの費用を見積りして貰う

④墓閉じ総額に問題なければ墓閉じの意向を墓の管理者に伝えます

※墓閉じについて、寺以外で面倒な事を言う管理人はいません

※寺墓の場合、離壇料を払う必要はありません（裁判なら勝ちます）

⑤仏式、神式なら、墓閉じの経（祝詞）を唱えて貰う（一万円〜三万円）

⑥ 出した遺骨を永代供養墓など、他の墓に移転すると『改葬』となります。

(改葬には墓の管理者だけでなく、墓のある行政許可も必要です)

⑦ 墓から出した遺骨を『散骨』又は『手元供養』なら改葬になりません

⑧ 墓閉じの途中で料金追加しない旨は事前の契約でハッキリさせます

⑨ 費用は石の使用量、墓の建ってる場所、通路状態により異なります

⑩ 散骨業者から少量の粉骨を貰い、手元供養も良いでしょう

・その他について

・葬式のマナー、大半は間違ってると思え

葬式で言われるマナーの殆どは無視して良く惑わされないことです。葬式に限らずのマナーとは何でしょう。日本で言われるマナーの多くはルールのように守るべき事のように、こうしなければ成らない、こうするものだとこの感覚が強い印象を受けますし、事実、自称評論家の人達は動作から、身に着けるもの、食べ方、話し方に至るまで、昔の喧しい姑のようです。また国や宗教、同じ国でも地域により習慣が違うようにマナーも違います。

例えば、韓国はクチャクチャ音をさせて食べる様子を見て、美味しそうと感じるようですが、日本では汚い食べ方と捉えられます。その日本人も蕎麦やうどんを食べる時は、ズルズル、ツルツルと音を立てるのが旨そうに聞こえるわけで、これを欧米人が見れば眉をひそめるはずで。とすれば、地域毎に全て違うのがマナーなら何をしても良いか——、と言われたら「NO」です。勿論、郷に入れば郷に従えで、地域の人達の真似をする方法もありますが、これではマナーとは何ぞやの答えに成りません。全世界共通で使えるマナーの考え方は『人に迷惑を掛けないこと』これが最低限のマナーです。食事と言えば、周囲に迷惑を掛けず、美味しく食べる事が最優先です。まあ地元ならクチャクチャ、ズルズルでも問題ありませんが、TPOによっては誰もが不快に成らない対応を心掛ければマナーとしては充分でしょう。

日本人がイタリアに行きスパゲティを食べると、どうしても蕎麦やうどんのようにすすりたくなるでしょうが、フォークに丸めて口に運べば、近くで食事をする地元の人達に嫌な思いはさせません。同様に中国の人は食事中に限らず大声で話しますが、やはり周囲の人に迷惑ですから、テーブル内に聞こえる程度の音量で話すべきです。

坊ちゃん育ちだった僕は小学校入学前から、父親にレストランでナイフとフォークの使い方やコース料理の食べ方など教えられました。そのせいでライスはフォークの背に乗せて食べたほうが楽です。ところが大人に成って海外は百回以上行ってますが、ライスのあるレストランでライスをフォークの背に乗せて食べてる欧米人を見たことがあります。でも人に迷惑は掛けませんから、背に乗せたり、フォークですくったり自然のまま食べてます。どんな集まりだったか忘れましたが、ある時、洋食のコース料理でテーブルにはレモンが一切れ入ったフィンガーボール指先を洗う為の水が置かれていました。料理が運ばれる前、隣に座った知人が突然フィンガーボールの水を飲んだのを見て驚き、周囲を見るとやはり驚いた顔をしてたので、僕も飲んでこう言いました。「やっぱ喉が渴いた時はレモンのサッパリ感が良いよね。こうしてグラスの水を足しておけば一緒だしね」

と自分と隣人のフィンガーボールにグラスの水を入れながら言うと、周囲の人達も笑顔で頷いてくれました。隣人は恥ずかしいそうにしていますが、そのテーブルは終止ニコやかな雰囲気での食事ができました。

手前味噌ですが、これがマナーの基本的な考え方だと思し、それを教え

てくれたのは父親との経験です。もしこれが葬式のマナーと書く人達だったならどうしたでしょう。それは手を洗う物だと指摘するのでしょうか――、使い方としては間違っていないませんが、人間としては間違っていると感じます。黒の礼服を持って無い人もいます。体形が違って着られない人もいます。相談に来た人の中には、父親の終幕が数日だろうとの事で入会に来られました。自分は他県在住の為、礼服を取りに行かなければと言うので、その必要は無く、今着てる私服で全く問題ない、更に他県在住の兄弟姉妹にも私服で来るよう伝えれば良いと話すと、安心して帰りその数日後は私服の兄弟姉妹三人で父親を送りました。

如何ですか、個々の家族毎にマナーより大事なこと、優先すべきことがあるのです。鬼の首を取ったようにマナーを強調する人達は、その前に人としての温もりを学ぶべきだと感じます。ゆえにマナーを定義付けするならば、『他人に迷惑を掛けず、思いやりの心を持つこと』ではないでしょうか。

・葬式で使う金は生きてる時に使うべし

実際のところは正確に分かりませんが、葬式は最低百万円掛かると口にす
る人が大半ですし、宗教者謝礼が最低三十万円と考えると、あながち間違い
では無いだろう気はします。百万、二百万の金はどうって事ない家族は別と
して、そうでない家族は頭に叩き込んで欲しい。『葬式代に掛かる費用が百
万円なら九十万円は生前に使い、十万円で作れる葬式をすべし』金は死んで
から使うものにあらず、生きてる人間の為に使って初めて意味ある物です。
二〇二一年、お勧めの葬式内容と参考費用（費用の掛からない順）

・「直葬」火葬だけのお葬式

- ① 搬送（病院、施設へのお迎え）
- ② 安置施設にて納棺した状態で安置（線香を供え、最低四十八時間）
- ③ 安置で使用するドライアイス等（十キロあれば充分）
- ④ 死亡届代行（コピー一枚は必須）
- ⑤ 霊柩搬送（斎場まで搬送・翌日朝一火葬が最善）
- ⑥ 骨壺一式（地域に使用する骨壺・西日本四寸、東日本七寸）

⑦ 記載無い葬具は一切必要ありません

④と⑤の間に『お別れの時間』を追加すれば、最後のお別れをしたい人達に逢って貰えるし、お別れの日にする事もできます。別途、棺用の茎の無い生花を用意して、会葬者に入れて貰っても良く、会葬に来てくれた人達は焼香してすぐ帰るのでなく、時間がある人は、お茶でも飲みながらゆっくり家族と話しもでき、無信仰者に最適で温かい葬式になるでしょう。できれば火葬は家族だけで翌日朝一番に行えば、火葬は午前中に終了する為、食事の準備不要で当日納骨もできます。食事はその後で食べても良いでしょう。

・ 「宗教者の入る家族葬」

- ① 搬送（病院、施設へのお迎え）
- ② 安置施設にて納棺した状態で安置（線香を供え、最低四十八時間）
- ③ 安置で使用するドライアイス等（四十八時間なら十キロあれば充分）
- ④ 死亡届代行（コピー一枚は必須）

- ⑤ 搬送した翌日の午後葬式（枕教・戒名で充分・当社参考価格五万円）
 - ⑥ 葬式後は、午後七時くらいまで、お別れの時間として使う・食事無用）
 - ⑤ 霊柩搬送（斎場まで搬送・翌日朝一火葬が最善）
 - ⑥ 骨壺一式（地域に使用する骨壺・西日本四寸、東日本七寸）
 - ⑦ 葬式用式場が必要（二十名程度の親戚までOK）
 - ⑦ 記載無い葬具は一切必要ありません（本家族葬は友引でも行えます）
- この家族葬での課題は二点です。

『宗教者』

- ・ 菩提寺で枕教と戒名だけで引き受けてくれるかは住職次第です
- ・ 菩提寺が無ければネットで依頼できる時代でしょう

『式場と祭壇』

- ・ 式場使用料が高額では意味がありません
- ・ 式場祭壇には供物類がありませんが、供物類は葬式後不要です
- ・ 安置室が利用できるなら、そこで読経もありです
- ・ 公営斎場によっては小さな式場を備えた所もあります

・状況により自宅で葬式も考えられます

記載無い葬具は一切必要ありませんとは、『遺影』『位牌』『湯かん』『白装束』『灯籠類』『菓子盛』『生花スタンド』『白木膳一式』『果物盛』等葬式で見る機会の多いものです。わずか一時間の葬式の為に数十万円の供物を買う必要はないと、当社は三十万円供えた状態の祭壇になっている訳です。『最後に』

・会員限定で、逝去後の依頼を受けない理由

「会員限定で逝去後の依頼は受けない」この言葉だけをみると、冷たい所とも感じるし、傲慢に思えるかもしれません。あんしんサポートも設立から数年間は逝去の依頼を普通に受けていたのです。それを受けなくなり、会員限定にしたのは二つの理由からです。

①『本気で家族目線を実現する為』

皆さんは家族目線と聞くと、どんな対応だと想像されるでしょうか？

「家族の立場で言動してくれることでしょうか？」

その通りです。ではあなたが葬儀社の立場で、考え方も、家族関係も、亡くなった経緯も、そして今の財布事情や様々な内部事情を何も知らない家族から、突然葬式依頼されたら、家族が満足する葬式ができると思いますか？僕には初めて逢った家族の考え方や今の事情を、見通す能力はありませんし、その家族に最適で最善な葬式施行をする自信もありません。

例えば「お金が無い」と言っても、百万円が無いのか、一万円が無いのか価値観は人それぞれだし、同じ人でも三年前と今は違うかもしれませんし、余裕がある時と、余裕が無い時の優先順位も変わって当然です。初めて逢って瞬時に理解できる人間がいるのでしょうか、少なくとも僕には無理です。だから逝去後になって突然の依頼も受けられないし入会も受けられないのです。

しかし多くの葬儀社は会員制と言いながら死後の入会も受けまますし、入会してなくても引き受けるのは何故でしょうか？ 答えは単純明快「儲かるから」

これ以外の何もありません。勿論、本気で家族の事など考えまませんし、考え

る必要もありません。何故か？ 依頼する家族がそれを望んで無いからです。葬儀屋なんて何処でも大差ないでしょ？ だから何の事前準備もしないし、死んだら電話すりゃあ何処でも喜んで引き受けるよ。とでも考えるのでしょうし現にその通りなのでしょう。どう考えようと家族の勝手ですから、考え方を否定するつもりはありません。後はそれで引き受ける葬儀社に依頼すれば良いだけの事、だから、あんしんサポートでは受けないのです。

② 『それを家族にも知って貰う為』

葬式は生活水準、故人の社会的立場、交友関係、考え方、更には故人と家族の関係や、その時点の財布事情など様々な複合要素により、行うべき葬式内容が違って当然です。前項で述べたように、あんしんサポート葬儀支援センターは本気で家族目線を実行する所であり、葬式内容以上に残る家族の生活を最優先しますから、

- ① 相談時点での財布事情、葬式の考え方、残る家族の生活予測を相談します
- ② 財布事情に変化があった場合を想定し、最低限必要な費用を伝えます
- ③ 各種手続きも含め、存命中の今すべき事を伝えます

④ 今感じる不安があれば全て聞き、必要なアドバイスをを行います

⑤ これ以降、死後の心配は一切せず安心して過ごせる事が最大目的です

費用も含め死後の心配を一切せず過ごすには、それなりの準備は絶対条件ですから、それが、その家族にとって何なのか知って貰い、更に安心できる状態まで動いて貰うしかないので。勿論、お金の心配は全く要らない人は、何もしなくても問題ありません。

・タイトル『葬式の間違いに気づけ』とは、

残る家族の生活が最優先とする家族目線から見ると、今の葬式は故人の為、故人の供養と、残る家族の事は全く考えず、自社の儲けばかりを追求する葬儀社と、何より宗教観を押し付け、寺の利益を優先する宗教者に押し切られる葬式が大半です。

コロナパンデミックで葬式の在り方が変わらざるを得なくなった今、大変ではありませんが、チャンスでもあります。過去の慣例に従うばかりが良いわけではありません。まずは残る家族の生活が守れる事を最優先とした葬式の在り方、墓の在り方を見直し是正するには絶好の機会であり、二〇三〇年代、団塊世代の終幕期前に『葬式改革』を完了しておく必要があります。

本書を読まれた方が、今の葬式の在り方に疑問を持ち、生きてる人間のほうが大事であると当たり前の認識を少しでも強く感じて貰えたら幸いです。

あんしんサポート葬儀支援センター 代表執行役員 武井利之

